して水仙が此方の地に適さぬといふのではない。

之を植るには、壌土六分砂四分位の割に合した土がよろしい、或は腐葉土も交るものがある、肥料は種々あらうが、屎が一番適するやうに古來から言つて居る、今日では燐酸肥料などがよいかも知れぬ。夫で此肥料を能く灌いだ土の中へ植え込ので、植替は、他の植物と違つて、夏の土用から土用過ぎ十日位がよいといふ。蓋し夏になつて暑熱の爲に葉が流れるからであらう、然し百花培養考には立秋後がよいとある。いづれにしても夏の末頃ならば悪くは無いのである。

植替若くは分蘖をしてからは、當分其儘にして置いて、萠芽を始めたならば薄い肥料を遣つて、夫より花の莖の見える頃までは、屢々肥料を灌ぐ必要があるが、何種の花物にも忌む如く、苔が出てからは、決して肥料を與へてはならない、花莖が弱くなるからである。

夫から水仙の實生といふも面白い事である。此法は夏の土用の小暑頃に實の生熟したものを採つて、直ちに鉢へ蒔き附け、適宜に灌漑すれば、古根のものに少し遲れて萠芽するので、三年目若くは四年目になると悉く花を附けるやうになるが、然しこれは古根を培養するのから見ると、餘程注意を要する場合がある。

又唐水仙と言ふのがある。これは青托靚と書くので、近來坊間の支那物屋などにて、球根の儘に送つて來るのを、蟹作などにして賣るのがあるこれは水盤中に養つて、所謂文人墨客が机上に愛玩するのである。

水仙の根が藥となる事に就いては、球根の外皮を剝き能く碎きて、其絞り液を乳に和して點せば突眼を治すとあるが、有毒草木圖譜には水仙毒

あり、誤つて根を食すれば忽ち暴瀉すとあるから、外用すれば藥となるが、内用には毒と見える。

又近來ナアシツサス、ダホジルスなどと言つて西洋水仙が舶載する、これは非常に美麗なもので、到底從來の水仙の比てはないが、然し其喇叭咲などゝ稱するものは、在來の水仙に見るが如き雅嫻の態に乏しいのは是非もない。

春の七草

芹　Oenanthe stolonifera *DC.*
Sium Sisarum L.

薺　Capsella Bursa pastoris (L.) *Moench.*

御形　Gnaphalium multiceps *Wall.*

繁蔞　Stellaria media (L.) *Vill.*

佛の坐　卷耳　Cerastium vulgatum L.
var. alpinum *Koch.*
var. glandulososum *Koch.*

土盤　Trigonotis peduncularis *Benth.*

Eritrichium pedunculare DC.

菁　*Brassica campestris L.* (Cruciferæ.)

B. chinensis L.

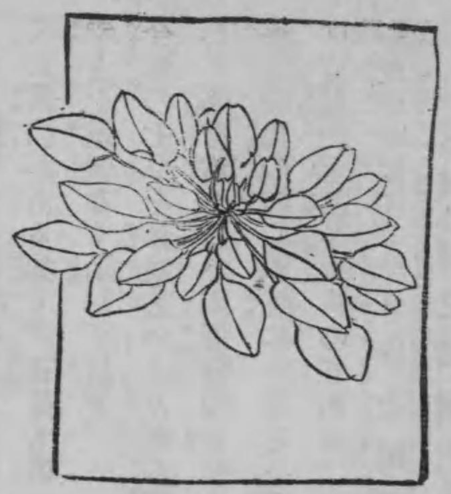
鈴代　*Raphanus sativus L.*

何人も知る如く七草には春と秋との二つあるが。秋の七草の方は、俳ひにも萬葉集に收められた山上憶良の歌からして非常に有名の者になつた。此山上憶良といふ人は、大寶三年に粟田眞人に從つて入唐し、和銅の末に從五位下に陞され、伯耆守筑前守等に歴任して、天平五年六月七十四歳で死んだ人で、歌林類聚の著者である。

夫は春の七草にも、天台座主慈圓大僧正の「けふそかしなつなはこへら芹つみてはや七くさのおもの參らむ」といふ歌があるが、憶良のやうに人口に膾炙しない。慈圓といふ人は、謚して慈鎮と言はれた、關白藤原忠通の子である。此人の僻は、苟しくも一技一能ある者は賤夫野郎と雖も賑恤して棄てなかつたといふ、極めて博愛の性質で、嘉祿元年九月二十五日に入寂した、其著書に愚管抄といふがある。

慈鎮のも憶良のも今日から考へて見ると、さして名歌とも思へぬが、憶良の秋の七草のみ獨盛名を專らにして居るのは、其花の勝れてやさしいのにもよるが、一は屠蘇の醉に浮されて居る春の始めに當つて、凍てついて居る霜柱の下から掘り出すのであるから、或る一種の物好の外には、態々採集しやうの、盆栽に造らうのといふ野心は出ない、譬へば造つた處で可憐の趣のみは得られるけれども、秋草を一盆に集めて、コセさしたやうな風致は見られない。

其點になると秋草である、草木凋落して、野も山も次第に枯れ行かうとする時、千草百草咲き亂れて居る中より、七草の粹を拔いて、敗醬桔梗の研を競ひ、尾花葛の花の繊を仄めかす風情は、到底春の七草の只僅かに可愛らしいといふ丈の點には止まらない。



みみなぐさ初生

剩さへ春の初めには年禮やら宴會やら或は樣々の遊興やらで目も眩む斗りに急がしいのであるから、一般には實に渺たる此草の研究などをして居る暇は無い、然るに秋の七草となると、菊にも早し紅葉にも早し、時候も適くなるといふので、我も〳〵と郊外に押し出すもあれば、橐駝師の庭に就くのもある、是等は稍花を解する者であるが、甚だしいのは、自分が秋草を一

番早く見て來たといふのを誇りたいのと、流行衣裳の魁を見せたいといふのとで、向島の百花園などは、甚だしい雜沓を見るのである。

人に興亡がある如く、花にも盛衰があつて、春と秋との七草は、幸と不幸とを遺憾なく示して居る。

今春の七草を盆栽といふ方から解説せずに、正月人日に七種の菜を和して粥を炊くといふ舊習の方からすると、これは頗る古い事で、世俗「唐土の鳥の渡らぬ先に」などと俎板を叩き立てるけれども、本來此古事は支那から渡つたものである。

荆楚歳時記に「人日以七種菜爲羹翦綵爲人或鏤金箔爲人以貼屏風亦載之頭鬢」とある。又淵朝樂事に「民間婦女各以春旛春勝鏤金簇綵爲燕蝶之屬問遺親戚綴之釵頭擧酒則切粉皮雜以七種生菜供奉筵間云々」とある。日本では業に延喜式を以て、「七種之數薺、繁蘩、芹、菁、御形、須々代、佛之座」と定められて居る、これは今日の七

草といふ者と同名であるけれども、或は今日のものとは同名で異物のもあるかも知れない。例の清女の枕草紙にも『七日の若菜を人の六日に持歩き取散しなどするに見も知らぬ草を子供の持て來るを何とか是をいふといへども頓にも言はずこれかれ見合て耳菜草となんいふといふものあれば尤もなりけりと聞かぬ顔なるはなと笑ふに云々』とある。鴨長明の四季物語にも、『七草の見草集むる事人日さいかうを和すれば一歳の病患を免るゝと申す例古き文に侍るとかや此事三十あまり四はしらに當らせ玉ふ豐御食炊屋姫の五歳に事起りて都の七ッ野とて七ヶ所の野にて一草づゝ分ち取らせ玉ひけり』とあるに因て見れば、單に七草を集むるのみにあらずして、之を摘むには各別に七ヶ所の野にて採集せねばならぬ法があつたと見える。前の四季物語に一歳の病患を免れるとあるのは、漢語抄に『春服青菜羹治百病』とも又『十五日大炊寮内藏寮大膳職献豆粥並七種十二菜之粥云々』

ともある。これて見ると十五日の小豆粥に七草を併せ用るやうにも思はれる。引證は幾らもあるが。然し皆典故の方で、これを栽えて翫賞したといふ事は見當らない、之を以ても

秋の七草の單に見るといふ事を專らにし眺に供すといふ點に於て發達したに及ばないは勿論である。

今日七草といふものは、七草粥の頒れた以來、一々其名を擧げ得る者も少なくなつたのみならず、稀に七草粥の舊慣を守る人も、僅かに薺と菜との二種を用ふる位に止まつて居るから、現に御形や佛の座に接しても、其何者たるやを知らないは無理ならぬ話である。

甚だ烏滸の至りではあるけれども、七草に就いて少しく說明をするも、萬更無用でもあるまいと思ふ。

「佛の座は第一に諸說紛々たるもので、藕(公事根源＝藕は荷の根俗に蓮根)車前(別事公事根源＝おんばこ俗かい)喜蘭草世俗碎米薺菠薐草(大寶馬療方＝げんけ草法蓮草)臭蒿(損軒說＝一名土器草田平子)なぞ各說るは)を異にして居る。亦大日經義釋に「西方持誦者多用吉祥茅爲藉此有多利益一者以如來成道時所坐故一切世間以爲吉祥故持誦者藉之障不生也又諸毒蟲等若敷之者皆不得其處至也又性甚香潔也此草極利觸身易破如兩刃刀形也行持誦者餘暇而休息時寢此草藉若放逸自縱即爲所傷故不得縱慢也又佛所以自藉此草者除世間憍慢心故爲太子時種々逸樂坐臥寶床寶几承足置等若出家猶習之即與本在家不異以能除如是而坐草藉一切

人天皆生敬心亦効除慢心入正法」とある。此草即ち吉祥草は佛の坐てあるといふが、果して然るや否やは疑問である。

或者は損軒説の臭蒿を田平子といふのは、どうも誤らしい、たひらこは蘩蘊の事で、決して佛坐ではないといふ説もあるが、菊塢の春七草考に『埃嚢抄の歌の御行たひらこ佛の坐と有る故に別草とのみ思へるものか此歌のたひらこはこべらの書誤りなるべし（中略）埃嚢抄の一首にはこべらとあるにても知るべしと、』と言つて居る、孰れが正しいか知れぬが要するに藕も車前も喜蘭草も臭蒿も、皆其葉が地に密着して、恰かも佛坐の蓮花の如くであるから、佛の坐と呼んだものであらう、今いふ處の佛の坐は、即ち圖にもある如く、小さな蓮花の葩様の葉が重なつて、恰も菊の花の如く、本草綱目では鷄腸草とある、其釋説に、『カハラケナ、オハコベ、タヒラコ』――人日七種菜の一なり、葉形飯鍬の如く圓にして柄あり、葉地に搨して生ず、圓くさらかにして、生ずるところ土盌の如し、故に名く二月頃、莖を抽きて高さ六七寸許、其葉互ひに生ず、根に近き葉の飯鍬の形に類するものと同じからず、

はこべら

長くして柄なし、三月頃莖に穂をなして、五瓣の細小花を開く一分に足

らず、縹色なり」として有る。此草は凍着いて居る田の畔などに生へながら、充分の生色を帶びて居るもので、山の手や向島邊の野原の中に御形や薺などと共に點在して居る。

又耳無草は石竹科の植物で、これも其根生葉が地に蓆して居るので、古來佛の坐と呼ばれ、古書にも散見して居る。然し現に佛の坐なる名を有して居るのは唇形科の Lamium amplexicaule L. て有るが、此草の方は反つて昔から佛の坐の部には算入されて居ない、要するに、今春の七草の佛の坐なるものは、ミミナグサとタビラコの二種の中を適宜に取捨するといふ奇なる狀態になつて居る。

「芹」は繖形花科で今の田芹の事であらうか、古へは單に芹といふのは今の三ツ葉芹で、水芹は特に芹と言つたものである、延喜式に『芹を植る一段苗五石二月植ゆ』とあるけれども、これが今世にいふ所の芹ならば二月（太陽暦三四月）に苗を植る道理が無いから、三葉芹の方かも知れぬ、萬葉集に『君が爲山田の澤に芹摘むと雪げの水に裳のすそぬれぬ』などとある所を見ると、芹が今の芹で、今の三葉芹が昔の芹であつたらしい、其芹といふ名の源は、嚙むと芹ぐいからであると野菜譜に言つてあるが、どうやら牽強らしい。併しながら芹の若芽を摘むなぞといふがあるから、三葉の方が正しいかも知れぬが、兎も角今日ては水芹としてあるから、今いふ田芹と見るべきで、田芹ならば說明する迄もない。

「薺」は十字花科で漢名薺菜兒、和名抄には鷄毛菜の字を以て宛てゝ居る葬茗蘆（新撰字鏡）とも書くと見える、東坡も天生此物爲幽人山居之福と言つ

て居るが、どうも夫程旨い物であるとは受取れぬ。能く小兒がペン〳〵草といふものは、薺の莖で其先に白い細かな花が咲くのである、此莖の立たない間は、時に蒲公英と誤まる虞がある、此莖の延びたものは、古來『奴輩ん家を叩つこわしてペン〳〵草を生かすぞ』と、江戸兒のタンカを切るに用ひられたもので、以て野原や荒蕪地に自生するものたるや知るべしである。

「御形」は菊科植物で漢名鼠麹草和名母子草といふとある。文德實錄を見ると三月三日の草の餅には此鼠麹草を用ひたとある。して見ると昔は蓬を用ひなんだのか、或は蓬の外に之をも用ひたものか、其形は圖の如く幣帛に似て、佛の坐の在る所の野原には、是も自生して居る、花は矢張長い莖が立つて、黄色の細かいものである。

「蘩蔞」は石竹科に隷し、其形は今説く迄も無く、普ねく人の知る所のものである。今でこそ鳥の餌に用ひられる斗りであるが昔は可なり大切の藥草であつたと見えて、大和本草に『三月以後漸く老いて細白花を開き小實を結ぶ九月に生ず羹として食す

瘡腫を癒し秘結を通ず』と書かれて居る。新撰字鏡の蘊爾雅の敖は皆此藜蘊の事である。

「菁」は十字花科で即ちカブラナである。其一名を諸葛菜といふのは諸葛孔明が屯田の法を畫した時。兵士に蔓菁を栽えしめた事があるので、夫から名づけたといふが、浮雲いものである。河海抄にはすゞなのすゞといふのは狹々の義で小なる菜といふのである。又一説には蕪の根の鈴に似たるによるともある。

「須々代」は十字花科の蘿蔔で、公事根源の萊菔(つちお)又蘆菔である、鎮州に生ずるものは重さ十六斤とあるから、櫻島大根位の大さはあつたらう。

以上の七草を盆栽にするといふ事は、昔は餘り聞かないけれども、近頃百花園などでは奇麗な提籠に栽えて客の需めに應ずるやうである。これは少と粋な部類に屬するもので、鬼を欺むく大男が提げて歸つては一向似合はぬどうして

趣味の栽培　四季の園藝

も吾妻コートに吾妻下駄、潰島田に葛引といふやうな鮮麗の女が、七福詣の歸に向島の塢を歸つて來なければ圖にならないであらう。或人は交趾の鉢か何かへ、苦心して作つた事があつたけれども、全體が決して寂のあるものでないから、偖床へ幷べて見ると、どうも此青籠作の粋なる趣きには及ばないのは是非もない。

躑躅志

雙子葉門　石南科

山躑躅　Rhododendron indicum Sw. var. Kaempferi *Maxim.*

杜鵑花　Rhododendron indicum Sw.

var. K. var. macranthum *Maxim.*

石巖　Rhododendron indicum Sw.

var. K. var. m. var. obtusum *Maxim.*

紫石巖　Rhododendron indicum Sw.

var. K. var. m. var. o. var. amoenum *Maxim.*

蝦夷躑躅　Rhododendron kamtschaticum *Pall.*

日影躑躅　Rhododendron Keiskei *Miq.*

餅躑躅 Rhododendron ledifolium *Don.*
白杜鵑花 Rhododendron ledifolium *Don.*
var. leucanthum DC.
淀川躑躅 Rhododendron ledifolium *Don.*
var. I. var. narcissiflorum *Maxim.*
青海躑躅 Lhodonendron linearifolium S. et Z.
曙躑躅 Rhododendron pentaphyllum *Maxim.*
五葉躑躅 Rhododendron quinquetolium Biss. et Mre.
黒船躑躅 Rhododendron Schlippenbachii *Maxim.*
釣鐘躑躅 Rhododendron rhombicum *Miq.*
梅花躑躅 Rhododendron semibarbatum *Maxim.*
温泉躑躅 Rhododendron serpyllifolium *Miq.*
羊躑躅 Rhododendron sinense Sw.
大石巖 Rhododendron sublanceolatam *Miq.*
白花米躑躅 Rhododendron Tschonskii *Maxim.*
三葉躑躅 Rhododendron dilatatum *Miq.*

久留米躑躅の起原

躑躅の種類は非常に多い、以上に掲げた位では中々盡さないのみならず園藝上の變品は殆んど枚擧に遑あらぬが、就中久留米躑躅の如く進歩したのは實に珍らしい、今日植物學が進歩して、園藝上の技術は非常に發達した、右を押せば左が上るといふ理屈が、机の上で會得されるやうになつたが、偖實際に於て久留米躑躅のやうなものを現實せしめる事は容

易の術であらうか、蓋し問題で無くばならない。

本來躑躅は花が美しいので、昔から諸國で流行したものには違ひないが中頃漸く頽れて、東京でも其名所としては、僅かに大久保の花戸で餘喘を保つて居たので有るが、夫も大半は日比谷公園創設の際に移植されて了つた、然し昨今に及んで、稍恢復の機運に及んだのみならず、促開の切花として珍重され、日比谷の壯觀に眩せられて、庭園に躑躅を植える者が多くなつたのは、躑躅の爲に喜ばしき現象で有る。

然しながら躑躅は大抵露地に栽培せらるゝのみて、盆栽としては餘り重んじられない。箱根米躑躅、温泉躑躅、白花米躑躅などの外には、野趣津々たる盆栽なるものは全く見られない。さればとて、花を主眼として培植したるものも又獲られぬので、其之有るは實に久留米躑躅のみてある。

今其起源を訊ねて見ると、今より百數十年前、筑後久留米藩の士人中の躑躅栽培に源を發する。

憶ふに此當時は、德川氏全盛の泰平時代で、華奢風流を競ふ世の中であつたから、花卉盆栽などの流行も元より旺盛て有つた。殊に櫻草、山茶、曼麥などゝ、一體に花物が流行した時代て有つたから、躑躅の如く美しき花が疎外されべき筈がない、孰れ大阪邊からの流行が傳播したものであらが、これが偶然久留米人士の嗜好に投じ、町家でさへも盛に栽培するやうになつた。然し此當時は、山野から石巖の大株を採掘し來り、庭園に栽ゑる位で、まだ鉢に栽ゑると迄行かぬ程て有るから、園藝上の變品を造り出すといふ洒落も謀叛氣もあらう筈はない、只自然のものを自

然の姿で眺めるだけで有つたが、其後二十年ばかりにして、坂本元藏といふ人が出た。

此人は藩の馬廻役であつたが、性來花卉が好で、常に自ら剪鋏を入れ。鍬鋤を執つて誇りとして居たので、無論流行の躑躅に指を染めぬ筈はない。然し竊かに思ふに、單純なる野生其儘の姿では、如何にも曲が無いから、一つ目を驚かすやうな新種を拵へて見たいといふ氣を出した。夫には播種以外に方法も手段もない、他の草花が播種によりて、時に新種を獲る事が有るから、躑躅も必ず成功するに違ひないと、久留米梅林寺の庭や、高良山や、其他各地に有る石巖の種子を採つて、幾度も播種を試たが、始め漠然豫期したやうには問屋で卸さない、再三再四、殆んど五六年も續けて試みたが、新種どころか、芽さへ生へない始末で流石の坂本も殆んど根氣負けがした、然し夫でも未練で、今年もう一度試みて、夫でいけなければ斷念しやうと、或日庭の苗場へ出て、いざ播種せんものと、微細なる種子を掌に載せる途段、無情の强風颯と吹き來りて掌上微塵の愛子を吹き飛ばして了つた。是に至つて流石我慢の坂本も、最早天意に副はざる事業として、諦めて了ふと、豈圖らんや不思議にも日を經て庭の隅から躑躅の實生が簇々と發芽した、天は決して無情ではなかつた、勞には必ず酬ゆるので有る。坂本は死兒が蘇生したやうな喜びで有る。天は口なくして秘訣を敎へたので有つた。躑躅の種子は土を蔽はぬばかりに淺く蒔かねばならぬ、其外氣候や、温度等に就いても發明する所があつたので、坂本は爾來年々播種した結果、二三の新種をすら得るに至つた、これが實に今日の久留米躑躅の起因となつたのてあ

る。

坂本の後繼者

坂本は斯の如くして新種を獲ると共に、自分が見飽ると惜まず同好の士に分與し、自らは更に新種を獲る事に力めた。勿論此時代の事で有るから、人工媒助などいふ事を知る筈はない、只白い花の側へ赤い花を置くと、其氣を受けて更紗が出來る位の考へに過ぎなんだらしい。

初祖坂本は嘉永七年五月十八日に、亭年七十で死んだが、由來植物學者は長命だといふ説に對しても、彼は確に其資格が有る。

夫で坂本は死んんだが、彼の遺鉢は立派に繼承する者があつた。同藩士の笠井理中、西尾與右衞門、山田市藏、竹井圓、三浦國衞などの連中は實に彼の十哲ともいふべき高足であつたから、彼の死後と雖も、年毎に研究され、名花の輩出を見た。

此外にも安西茂八郎、小城庄藏、松屋治助、若松屋作平、石田與右左門梯詢、次などいふ人が相前後して出て、頻に新花會を開いて、斯道の奬勵をしたので、終に二百有餘の品種を造る事が出來た、夫で此頃には無論盆栽仕立が行はれて居たので有る。

初祖の番附

今參考として、初祖坂本が選んだ番附を見ると、東の方大關揚貴妃とあつて、關脇以下が順次下の如くで有る。

東之方		西之方	
大關	楊貴妃	大關	位の紐
關脇	裙濃の糸	關脇	大和錦
小結	高蒔繪	小結	玉芙蓉

前頭　浮む瀬
同　白妙
同　初元結
同　嵐山
同　鶴の羽重
同　吹給形

前頭　玉の臺
同　呉羽
同　郭公
同　笑顔
同　雪の駒
同　見遊

以上が幕内格で、各々二段目三段目を有して居た。然も此中には留花と稱して、是等同好者間、若くは久留米城下以外へは、決して搬出する事を許さなんだ花さへあつた。

明治以後

星移り物變り、さしも榮耀全盛を誇つた久留米躑躅も、明治維新の變に會して、躑躅どころの沙汰ではないので、一時殆んど衰頽したけれども明治二十四五年頃に至つて、時運に際會して、急に勃興して來た。

然し此花の沈淪中にも拘らず、猶熱心に培養して居たのは、岡本民治、吉田熈長、牛島濟民、中野勝次郎の諸氏で、今日では殘念ながら、大抵故人になつて了つたが、是等の人士が此花の命脈を今日に維持し、中興の素因を造つたのは、特筆大書すべきて有る。

其外にも、小城八次、吉村利平、吉村長平、淵上彌八、蘇山廣次の諸氏も、以上の諸氏に比肩すべき功勞は充分に認められる。殊に淵上氏が逸品以呂波を出し、横山氏が九重を出したなどは、優に斯界に一新紀元を劃したと言つてよい、

斯て明治二十八年、日清戰役の當時に、聊か軍旅の大御心を慰め奉つるべく、逸品十一種を雲上に献じ、御嘉納あらせられた、其時に献者の一

人吉村利平といふ人が、錦光花といふ名を命じたので、夫以來久留米躑躅一名錦光花といふ事になつた。

此錦光花の名には、必ず由來が有るに違ひないと思はれるが、業に通俗なる久留米躑躅の名がある以上、寧ろ蛇足では有るまいかと思はれる。

次いで明治三十六年には、赤司廣樂園から、博覽會に出品して、二等賞牌を得、其他東宮御慶事に際して献上したり、故小松宮殿下の御買上を蒙つたなども、此花の進境に一方ならぬ利益であつた。

花形の大別

新種又新種で、久留米躑躅の品種は益々殖えて來たけれども、花の形によつて凡そ八種に分類する事が出來る。

猪口咲……花瓣濶大にして、瓣端圓く、猪口狀をなす。

劒咲……花瓣狹長にして尖鋭、劒狀をなす。

並花……以上の二種の中間なるもの。

二重猪口咲……猪口咲の二重に襲りたるもの。

二重劒咲……劒咲の二重なるもの。

蓑咲……猪口咲、劒咲、並咲の別なく、總て二重咲にして、外瓣の伸び惡く、內瓣の周圍に蓑を掛けたるが如き形狀を有するもの。

本眞……雄蕊の發育不完全にして、花底に隱著し、雌蕊のみ充分に發育したる者

是等の中には、花の大中小は勿論、花の色も、白、紅、淡紅、朱、鴇、紫、青白、醉白、乳白、絞等、一々名狀しがたい。

花品の鑑別

牡丹の花品に、正しい規則が有る如く、躑躅にも夫々の資格を具備せねばならぬ。其規則として。

第一　花容端正にして縮皺なく、花瓣肉厚きをよしとす。二重咲にありては、重瓣密接せるを尊ぶ。夫で一般に大狂にして、縮なきを良品とす。

第二　花梗短かくして強きを尊ぶ。長き時は梗弱く、雨露の爲に俛首する缺點あり。

第三　花の色には潤澤あるべし、又一花にして濃淡著るしく、或は周邊濃く、底部に向ふに從ひて薄くなるを佳なりとす。

第四　花輪の大小を以て品位を定めず、數十花簇開して、形傘の如きを佳とす。

第五　類似なき容色を珍奇なりとし、其畸を尊ぶ。

第六　實生樹の審査は六年にして始めて定むべし。躑躅は初年優等なるも、次年には全く劣等種に變ずる事あり、又劣等種にして、頓て珍品と化する事あれば、三年間の成蹟によらざれば、濫りに斷ずるは早計たるを免かれず、

第七　容色の盛久しきを尊び、早く凋落するを喜ばず。

第八　雌雄蕊の發育良好なるを選ぶ。結實佳良の爲なり。

以上は躑躅の審査には、一通心得べき點で有る。

栽培

土は凡て壤土質で輕索なるが宜い。鍬の刄に粘着するやうな重粘土や、排水の不良なる土質は絶對に禁物で有る。成るべくは鉢の中に、十分の二位川砂を混じたのでよい。

栽培者が最も注意しつゝ有る移植期は、十月下旬より五月上旬とする

一般には花さへ謝せば、直に移植してよいと言ふけれども、遠隔地へ輸送するには、蕾の全く固い間で無くばならない。

肥料としては、從來粉狀油滓一升に水二斗を混じ、稀薄に腐熟さしたものを、移植後一回、梅雨後一回、秋の彼岸に一回といふやうに與へるが、其間に骨粉、若くは乾鰮の類を粉末にして、鉢の中へ埋込むのがよい。鉢は上の開いた圓筒形で、狹い鍔の有る素燒を使用するが、之は鉢の深いものは、底の方へ木炭を入れて、排水の利便を計り得るのと、適度の濕氣を保たせ得るに便なる爲で有る。又一つには花傘の如くに造られたる蹲踞は、鉢の高さに見榮が有る爲てあらう。

樹容を整頓するには、花後麻絲木綿絲の類で、適宜に枝を釣り、厚薄疎密の無いやうにして、三四年も立派に仕立ると、立派に花傘や、球のやうな形が出來上る。其外見臺形に作るのや、鳥獸の形にするなど、殆んど隨意で有るが、久留米では重に見臺と傘形との二樣式を用ゐて居る。

夫から此植物は、直接日光に爛射されるのを嫌ふから、夏中は日除をしてやる必要が有るが、之と共に風通しを良好にしないと、蟲害を蒙る事が有る。

蟲害

此樹の害蟲は、蓑蟲、蛞蝓、蚜蟲、貝殼蟲等で、蓑蟲と蛞蝓とは葉と花とを害し、貝殼蟲は樹皮に密着して、其精力を衰頽せしめるから、害蟲の驅除は少時も怠つてはならぬ。

西洋の蹲踞

一般にアゼレアと呼ばれる西洋蹲踞は、其造り法が、殆んど此久留米に

似て、暗合か、模倣かは知らぬが、大抵は花傘造である。花の美なる點は、慥かに西洋の方が優つて居る。然し花の鑑別が、久留米躑躅の如き嚴格な資格を要さゞると、西洋のは大抵嫁接で、日本のは殆んど實生て有るから、仕立方の難易輕重は同日の論てはない。

風早の三保の浦曲の白躑躅見れとも淋しなき人思へば
忘るなよとをつの濱の岩つゝし山を超ても又かへりみん
春ふかき忍ふの山の岩つゝし言れと野邊にしるき頃哉
道のくのちかの浦にて見ましかは如何に躑躅のなかしからまし
花の散る慰めにせんすか原や伏見の里の岩つゝし見て
紅のやしほの丘の岩つゝしこや山姫のまくり手の袖

櫻草小話

雙子葉門　櫻草科　一茶

我邦は草も櫻を咲にけり

と狷介奇矯の俳士によりて我國粹を諷誦したる櫻草は、我邦の名花として、卓越せる奇品を出す事は、種藝の上に於ける誇りて有る。

藏報春や、四季咲櫻草が、雲南より歐洲に渡つて、始めて立派な園藝植物となり、重瓣を出すと共に、種々の色彩を變出し得たのみならず、殆んど純然たる温室裡の寵兒にして了つたけれども、我櫻草に於けるが如く、數百種の品種を輩出したのとは、到底比肩されない。

我櫻草は野生草花中、五指中に屈すべき美を有しては居るが、元より單瓣曇紅色の花に過ぎない。夫を人工を以て變化し來り、色彩などは全く

千變萬化なるのみならず、花葉共に野生種とは全く卓絶せしめた。然も夫が科學の思想を涵養したる今日ではなく、全く花の結實に至る理由さへ知らない德川氏の中世なるに至つては、更に感嘆の聲を發せざるを得ない。

今日にても櫻草の野生は、東京府下の荒川沿岸に於いて、恐くは全世界に於て、又見る可らざる盛觀に逢著する事が出來る。

中仙道の板橋を北すれば、直に戸田の原に至る、今ても圃と原と相交はつて居るが、此原は古來櫻草の產地として聞えた。然し戸田、志村、豐島等、荒川沿岸の沮洳地、冲積土の層をなす處には、宛ら苗場に蒔附けたのが一時に開いたかのやうに簇開する。

就中浮間の原といふのは、舊日鐵線赤羽の停車場を出て、西北へ丘阜を超え、十四五町にして浮間の渡頭へ出る。

春意の纏綿が人の心を誑かす時、笑ふ柳の花の濃かなる、寒からぬ雪かと飛ぶ所、茅屋の棟に蝴蝶花の芽ぐむ風情に、長閑なる田園の趣味を掬しつゝ、穩波悠々たる長江に舟を呼んで渡ると、直に浮間の原で有る、原の廣袤は數十町歩、全く耕耘さるゝ事なくして、夏より秋に渡りて、蘆花雪より白き葭原となる、茅萱の材料は、多く此一帶の沿岸から採集されるので有る。櫻草は實に此根形に有つて、夏日の爛射より陰蔽されるので、春毎に美しき俤を變へない。

春四月、烟りも敢へぬ遊に誘かされて、試に筇を曳くと、此廣き原は一體に毛氈を布いたやうに美しい。紅、黃、紫、白、綠、此五彩が燦然として天然の紋樣を織成するを見るであらう。

其紅なるは則ち櫻草で七分を占め、黄なるは、大戟の二分、然して殘りの一分を紫白綠で分割して居る、紫なるは水甘草、白きは白花菫、綠なるは下萠え始し若草で有る。渺茫たる原頭は、一面に彩られたるに、雲雀の飛立つのが、十文字に啼く風情は、塵寰を絶えたる仙境で有る。櫻草の野生地多しと雖も、斯の如く簇生する所は恐らくない。吾人は名所として、此地を是非保護したいと思ふ。

櫻草の培養土は、腐植土。砂、及び壤土を和して、排水佳良ならしめ、秋の末に分糞して植込むので有る肥料としては下肥の稀薄なるものか、又は骨粉と油滓などを和したものを薄くして、再々與へるのがよい。

蕃殖は分蘖にあるが、變品を出すのは、是非播種せねばならぬ。播種は採蒔もよし、或ひは、秋の彼岸頃に播くも宜しい。素人でも、往々新種を造出す事が有る。

櫻草の銘鑑として傳へられたものには、左に掲ぐる品種が有る、之を見ても藏報春の比でない事が解る。

千代鶴　白狂咲大輪
玉芙蓉　裏紅表白中輪
香爐峰　白最大輪
松の位　表白裏紫大輪
水鏡　薄鴇色大輪
仙人　薄桃色表白大輪
司召　裏紅表白大輪
墨染衣　薄鴇色表白大輪
銀龍　表白裏鴇色大輪
月の栗　白大輪
初時雨　表白裏鴇色大輪
旭の光　裏紅表白中輪
龍宮海　白大輪
櫻川　表白裏小紋大輪
唐子遊　桃色表白中輪
月の宴　桃色白斑大輪

越路の雪　白大輪
乙女の袖　裏紅表飛白
玉孔雀　鴇色表白大輪
獅子奮迅　淡紅底白大輪
藤娘　薄藤色表白大輪
連鶴　白中輪
千鳥遊　薄色表斑紋あり野生の櫻草よりも小輪
衣通姫　移白大輪
七賢人　薄桃色紅斑點大輪
手弱女　搗色表白大輪
福包　薄桃色表白大輪

大盃　紅大輪
笑布袋　鴇色地紅小紋
内裏遊　表白裏薄桃色
隠れ簑　薄色表白大輪
一拳　桃色表白大輪
大内錦　裏紅表白大輪
王照君　表白裏薄紅色
吉野山　表白裏淡紅紫色
嵐山　薄暗色表白
雨中の櫻　淡紅網目絞大輪
代々の譽　藤色大輪

玉珊瑚　本紅玉咲中輪
夕陽　紅大輪
五大洲　薄桃色表白大輪
唐錦　裏紅表白大輪
君ケ代　薄紅表白平咲
醉美人　薄鴇色地紅紋
淡雪　白大輪
西王母　桃色内暗色大輪
智仁勇　濃鴇色表白大輪
玉の臺　淡紅表暗白大輪
夜光の玉　白中輪

龍門　裏薄色表乳白
玉選集　紅底暗色大輪
江天鳴鶴　表紅表移白大輪
歌枕　裏紅表白大輪
唐獅子　薄紅中輪
光徽殿　裏薄紅表白中輪
金孔雀　裏紅表白大輪
王光梅　本紅中輪
青葉の笛　白地緑斑中輪
都の紅　紅爪白小輪
白小町　白大輪

富士の雪　白大輪
紅唐紙　中紅大輪
三笠山　紅大輪
源氏鏡　移白小輪
樊噲　薄紫大輪
羅生門　薄紫大輪
朝霧　移紫中輪
墨染櫻　薄紫中輪
舞扇　裏紅表暗色中輪
堅田浦　紫大輪
御幸　紅中輪
龍田姫　移白地紅絞中輪
旭の袂　裏紅表移紅
汐衣　薄桃色大輪

此外百種に上るので、一々掲げる事は出來ない。

昔は此花が非常に流行したものであつたが、今二三好事者が慰みにする位で、一般には流行しない。今も染井の花戸では、櫻草を培養して居るが、元より昔と比較したなら、言ふに足らないので有る、然し西洋舶載の草花を喜ぶ人が、藏報春や、四季咲櫻草を珍重しながら、更に一段の品種に富める我櫻草（プリムラ　コアチユソイデス）を顧みぬといふのは如何にも氣の知れぬ限りて有る。

本邦には櫻草屬が多い、則ちプリムラの屬名を有する者には

雪割小櫻　南京小櫻　白山小櫻　琉球小櫻
旌節草　大櫻草
木曾櫻　雛櫻
小岩櫻　岩櫻
羯鼓草　姫小櫻

て、多くは山地に生じ、普通野地に產するのは、櫻草の外には少ない。

薔薇の花

薔薇は何故喜ばれざるか

薔薇の花の濃艶富麗なる、必らずしも牡丹芍藥に劣らない、薔薇は實に立派な花の一語を以て、其風丰を形容し盡すので有るが、從來我邦俗の爲に喜ばれないのは、只一つ木刺が有る、といふ一點に過ぎぬので有る、笑を含むで毒を薦めるとか、花の陰に刺を藏すとか、薔薇の爲に甚だ不利益な證言が、邦俗の心證を惡くしたので有る。然し薔薇が木刺を持つといふ事は、自身の防衛に供する爲で、決して他を刺す目的ではない、猶日本刀の鋭利なるは、我日東帝國を護るが爲で、濫りに無辜の外邦を屠るが爲でないと同じで有る。然るに古來木刺有るものは式花に活く可らずなといふ沒識の杓子定規を拵へて、花道からすらも排斥したといふのは、甚だ當を得ぬ事で、其結果としては、終に薔薇といふものは、日本の園藝界に發達する事が出來なんだので、孰れも外國からの輸入を待つといふ有樣になつた、從來薔薇として日本の盆栽の端を汚し、其員に備つて居たのは、野薔薇、玫瑰位の者で他にも少しはあらうが、夫にしても木香式の花の小さなので、白黄、泰山白といふやうな式の者は、全たく見られないので有つた。

然し流石に白黄の美は捨られなんだと見え、此樹斗りは往々好事者が盆栽として養つたので、德川氏の末葉に、薔薇の事を說いた書物に見え。業に地錦抄にすら載せられて有るから、其頃芍藥、牡丹、櫻草類と共に薔薇を賞美する者が有つたに違ひないが、不幸にして例の木刺が何處迄

も祟るので、一般の流行を見るには到らなんだので有る。

薔薇は終に流行の機運に際會す

錐の嚢中に在る者、其末終に抉脱して、薔薇の眞價が漸く認識されるに至つたのは、外國で薔薇を珍重する事、從つて逸品を産出する事、夫が追〻輸入されるので、其花を見ると、艶麗纎穠の極致を窮め、楚々として人を動かす色香が有る、最早木刺の事を言ふて居られない、種樹者の好尚は翕然として薔薇に集つた、動坂の薔薇新、美香園などが今日に及んだのは實に其結果で、小梅の長春園などは、今こそ業を廢したけれども當時は覇を薔薇社會に稱へて居つたもので有つた。

薔薇は英國の國花

日本では木刺が有るとて賤しむ薔薇も、處變れば品變るで、英國では之を國花として推重して居る、從つて薔薇は英國に於て最も發達し、次て米國、佛國で有るが、近來新種を輩出するのは、米國が最も盛んで有る。斯の如く泰西諸國で薔薇を愛玩する結果、薔薇を主題として、種々の物語や、詩なども出來、更に花詞の第一に指を屈されて居る。

譬へば薔薇の紅花と白花とを以て花束を作れば、「暖かき心」を意味し、草束に薔薇一輪を添ゆれば「欲する物を友より得」といふ辻占にもなる又滿開の花を、二個の蕾の上に置き添える時には、「秘密」といふ意味になる此秘密たるや、郎君と妾とより外知らざるもので、目と目で意味を通じる怪しからぬ者たるや論を俟たぬので有る。

薔薇の花の紅き仔細

泰西の口碑に因ると、本來薔薇の花といふものは、皆白いもので有つた

が、或春の日、多くの神が雲に乗つて、虚無漂渺の間を遊び戯むれて居ると、其中の愛の神が、誤つて神酒の壺を覆へしたので、颯と吹き來る風に溢るる神酒は霧と散つて、野に咲く薔薇に降り懸ると、白花は忽然として紅變し、夫以來紅花の新種を生じたといふのて有る。夫て愛の神の溢れし酒より變化したのて有るから、凡ての花詞では、皆愛と戀との意味を含むのて有ると。

薔薇は如何に見別べきか

薔薇を培養するとしても、其種類を尋ねて、性を窮めねばならぬ。薔薇なら凡て同じて有ると、飛んだ鵜の眞似の一視同仁を遣ると、お藏に火の附くやうな事が有る。此薔薇も又其如くて、蔓性も木性も、又二季咲四季咲も有る、大さく言へば一つの薔薇で有るけれども、小さく分けたら幾千種にもなる。其處て米國ては、單に一季咲二季咲、四季咲の三大別にして、又夫を左の十數種に小別する。

庭薔薇　苔薔薇
スコッチ薔薇　刺薔薇
常盤薔薇　アールシャー
バンクシアレ　ボールソールト
マルチフロラ　プレリー
ボルボン　ノイセット
マカルニー　ミクロヒラ
支那薔薇　茶薔薇
麝香薔薇

として居るけれども、假令此類別が正しいとしても、甚だわづらはしいので、現時薔薇通として聞える野村買笑氏は、其著書薔薇栽培法に於て

三性七類に大別して、幾千種の薔薇をも、皆此圏内に容れて、夫々戸籍を正して居る。

其三性七類といふのは

- 三性
  - 木性
  - 叢性
  - 蔓性
  - 薔薇の三大別
- 七類
  - 木性類
  - 叢性類
  - 蔓性類
  - 上記の三性を七類中に包容す。
  - 木性山椒薔薇類
  - 蔓性木香薔薇類
  - 蔓性野薔薇類
  - 蔓性玫瑰類

詰り七類中末の四類は、三性に該當すべき木性蔓性では有るが、他の木性蔓性類とは、多少其趣きを異にして居るので、漫然三性中には入れられない、一種獨立すべき者で有るから、七類として別に目安を立てたに過ない、木性類の薔薇は枝幹全く灌木の姿態を成し、枝梢毎に大抵花を着ける、所謂普通に薔薇といふ者は是で、四季咲を常とする、此種は概して花が富麗で、人に喜ばれる。

是に属するのは、

天國香　醉美人　扶桑紅　王照君　太平樂

十八公　泰山白　銀世界　楊貴紀　立田川
三光錦　西王母　金光殿　連城壁　初日影
泥中玉　泰山香　如葉花　獅子頭　星月夜
貴公子　不讓紅　七子遊　酒中花　華寶殿
滿月　黃金　玉芙蓉　酒中花　蝦夷錦
和合神　驪山月　白帝城　鳳凰錦　櫻鏡
旭之瀧　覓殘紅　錦帶紅　東天光　白吐香
金鸚鵡　鬱金香　世界圖　丁字車　美香登
白樂天　月之光　月之都　新世界　旭之空
旭之雪　虹之跡　日之出　銀之麓　雪之貢
都之空　寶鼎　宇宙　峰之雪　金鳳
醋鶏　大湊　鷄冠　白毫　麗色
專房　記念　敷島　白天國香　高砂
花車　慶典　羅綾袖　隨一白　雪見車
巧笑　▲友白髮　▲四季櫻　▲星影　錦文

都之錦　岩鏡　紅梅　慶雲　如蓮
建都　（▲印は野村氏實生）

叢性類は、根より數幹を叢生する特性が有るので、花は概して膨大で、一輪毎に就いて見る時は、如何にも立派て有るが、木振に趣致が乏しい。且つ其咲方も、一季二季四季と種々交つて居る。

今玉藻　天地光　猩々舞　鞠之曲　虎之洞
陽臺夢　錦衣紅　緋之袴　花大臣　長樂
見鶯　君が代　天地開　新天地　白星光
桃園　綾錦　（以上四季咲）
一條紅　狂獅子　黑海　五湖遊　清香
福色　大統領　瑞星　天鷲絨　錦障紅
磨墨　緋之司　玄赴　風車　夜光
黑牡丹

東錦　鮮紅　（以上一季咲）

蔓性類は、其枝條蔓の如くに伸びて、蜿蜒丈餘に度るので、垣や架に繞はせるに適する、此種を用ゐて、田舍風の柴戸や、花墜道などを作る時には頗ぶる面白い趣向が出來る。

月世界　瑞寶　金冠　金生城　大山吹
千里香　雲山香　黄之司　鶴頂紅　萬里香
金之麗　乙女袖　地球玉　旭之湊　白雲
（以上四季咲）
蜜眉花　隨一紅　淡雪　金紅雀　朝霞
（以上一季咲）

木性山椒薔薇といふのは、一に櫻薔薇とも呼んで居る、葉の形が普通の薔薇と違つて、山椒に酷似して居る、所謂奇數復葉の極めて細かいものて有る、开して木刺は細いが多い。

闘雪紅　佛見笑　（以上二季咲）
喜見笑　雪花　好交友　（以上一季咲）

蔓性木香薔薇といふのは、枝條が蔓性で、花が房を成す斗りに澤山着く。概して芳香峻棘で、常に虹蝶の塒となる、春漸く冲して、野も山も微笑む頃、此木の一本を植ゆる斗りて、氤氳たる薫りが庭に充つる程て有る。

龜玉　香世界　月の桂　月宮殿　十二一重

蔓性野薔薇といふのは、凡て野薔薇、則ち野性薔薇若くは之に近い者を指すので、大抵は單瓣稀に重瓣を交えるに過ぎない。

篝火　青山雪　明月　高根雪　加茂雪
陸白雪　蜀江錦　女化紅　無鬼者　墨水紅
瑞雲紅　漢宮春　春霞　如霜　春駒

殘星　雪柳　銀波　國華　濱錦

（以上一季咲）

蔓性玫瑰類は則ち苔薔薇に屬する品種で、俗ハマナスといふのは之である、木刺多けれども葉細に美しく、花も又鮮やかで有るから、盆栽として野薔薇に劣らぬ風致がある。

色自慢　班雪香　香雪　紅牡丹　十丈紅
闌奢待　大和錦　三國紅　金司香　濃麝香
宇治里　金世界　谷の雪　麒麟頭　春雲
殘雪　紫雪　玉馨　紫玉　濃錦　（以上一季咲）

以上は最近の銘鑑に因つたので有るが、猶日に月に新種が輸入されたるので、逸品は非常に多い、數年前輸入された、白鳳、金袍などの如きは、從來殆ど世に知られざりし米國の新種の、特に金袍は、恰かも花桃の源平のやうに一ッ木で有りながら、紅白、絞と種々の花が咲くので、非常に珍とされる、此外新來の名花として、左の十數種の如きは、從來日本に渡來せぬものて有つた。

俠美人　獨歩春　桃源　花襲　不斷花
金華憂　白襲　江戸櫻　紅雲　櫻桃香
乳の海　勝閑　驟時雨　少納言　若武者
白繻子　雪模様　雲の峰　夏の雪

以上は僕が成るべく原名に因り、敢て日本式新名を附したので有る。此の如く新種が續々として渡來するから、薔薇界の發展は驚くべき者で從つて其價格も、接下し物で一本五圓もするやうな流行を來たした。

誰にても接げる木は何か

と問へば、直ちに薔薇と答へるより外はない、大抵の木は接木法によつ

て蕃殖せしめられぬ事はないが、恐らく薔薇程接ぎ易い者はあるまい。僕は常に口で講釋は巧者に言ふが、接木などの技術と來ては實に拙いもので、自分も能く己れを知つて居るから曾て手を下した事はなかつたが薔薇丈は僕と雖も、殆んど百に一を失はぬ程に活く。僕でさへ然りて有るから如何なる不器用者でも、必ず成効するに違ひない。

凡ての接木は同一理では有るが、特に薔薇の接砧は、根ごしらへといふ事が必要だ、砧木は野薔薇か長春類で、接木季候は十一、十二、一月の外は何時でもよい、然し此寒中と雖も、温室又は夫に相當する設備があれば差支へはない、然し要するに、

春接　二月十日頃より三月中旬迄
夏接　六月十日頃より六月下旬迄
秋接　八月十日頃より九月下旬迄

右が最も適當であるが、春接は寒明過と殆んど同時て、餘寒が嚴しいから硝子蓋をかけた木框の中へても入れて、寒氣を防がねばならぬ。

接砧の根拵へ

接砧の野薔薇は、野原から採集して來るか、長春なら接木にして三四年目位から用ゐるが、少し數多く接ぐ時には、埼玉の安行邊から砧木を取寄せると立派な砧木でも百本五六十錢で買へる、偖之を取寄せたらば、根の延びたのを剪み、房々した鬚根も捲り捨て、砧木の勢力を減殺するのが、則ち根拵への秘法で有る。幾ら上手に接いても、砧木の勢力を減殺する方法を知らないと、殆んで徒勞に歸して了ふので有る。

斯した砧木は、根元から一寸位に曳切つて、瘡面を鋭利なる小刀で削り

然る後に接穂に懸る。

接穂の選び方

接穂は春接の穂ならば前年の秋口に出た新枝、夏接秋接は凡て前季の枝で、十分に發育したものを選ぶので有るが枝が若いと接穂に不適當で有るから、能く其熟否を鑑別しなければならぬ、枝を見別る位は容易なやうでも、屢々見誤る事が有るから、其場合には枝の木刺を透かして全く不透明なるは成熟、幾分か透明の處の有るのは未熟と思へば差支へない。

穂の長さは、必ずしも一定しない、二芽づゝ附けるといふのが通例であるが、貴重な枝を殖すには、一芽がけでも差支ない。

薔薇の接方

接木には切接、呼接、挿接、芽接、割接、皮接と、其方法は澤山あるが普通の切接が、容易で安全で有る。

第一圖「ばら」の臺木

切接は前記の根の拵らへ方に於ける如く砧木を一寸位に鋸で曳切つて、其瘡面を削り、次に砧木の一方の側面を、皮と木質部との中間を睨むて鋭利の小刀で四五分の長さに切り込む事圖の如くて有る。深からず、淺

からず、削るに當つて躊躇せず、又焦らず、一刀に靜々と切下るのて有る。斯して一方には接穗を二芽かけて圖の如くに削づり、穗の切口

第二圖「ばら」の接穗と接方

と砧木の切口と、水洩さずと密着せしめた上、表皮を以て蓋ふのてある。

开して藁て緊と卷いて、砧木が埋る程に柔らかい土に埋けて置くと、砧木が鬚根を下すに連れて、接穗も芽を吹いて來、接口に肉を上げて、砧と穗と同一物と化して了ふ、極めて容易な手業で、然も此穗について居る新芽が延びれば、直ぐ花を開くのて、氣短かい者の慰さみに適合するのて有る。

此外の蕃殖法としては、挿芽、壓條、實生等、方法は澤山あるが、要するに接木が最も安全で成効し易い。

薔薇の肥料

薔薇の肥料は四季共新芽を吹く前に與へるのて、下肥、骨粉、油滓、干

鰯等を喜ぶ、普通家庭的の慰みとしては骨粉と油滓とを交ぜたものを、植替の際に土に混じるか又は水に腐らして澆ぎかけるが安全で有る、俗に肥中りと言ひて肥料の強過ぎる爲に。非常な害を及ぼす事が有る。

薔薇の害蟲

は貝殼蟲、蚜蟲、鐵砲蟲、其外裸蟲類が盛んに害をする其驅除方法は幾らもあるが、一利一害一長一短で、未だに滿足する方法を發見しない、面倒でも手を以て一々拂ひ落す方が輕便で有るらしい。

薔薇は實に蕃殖も容易で、花も美しいから、机上の一輪挿としても、花束としても、用ゐるとして可ならざるなし、花作の途に入らんとする者は、先薔薇より始められん事を勸める。

花つくり

蒲柳の質ともあらばこそ、鬼をも欺むく大男が。可憐の花を作る事を說くといふのは、頗る繪にならない圖柄で、流石に氣恥かしいやうな氣がする。

然し人間には何か一つの道樂はある、此道樂によつて、齷齪たる精神の過勞を慰する事が、唯一の樂しみで、頓て道樂と言はれるのも此爲である、「我には許せ數島の道」といふ風雅は此植木道に無いとした所で、自分には寧ろ夫以上の韻致が有ると思つて居る。其處で猫の額にも足らない前栽で、多年土ほじりをした經驗を、聊か語らうと思ふ。元より遂東の家ではあるが又他山の石とならぬとも限るまいと、偖は釋伽に說法の愚を演ずるのである、此處に揭げる處のものは。重に我邦に在りふれた草花か、又は古へ支那から舶載して來て。今日では殆んど日本化して了つたもの斗りを選む事にした。

鹿蹄草

科　雙子葉門

Pirola elliptica Nutt.

病葉のハラ〳〵と散る森の下道、或は小笹度る風の葉末を走る邊、朽葉軟かき丘阜などに、其丈僅かに三五寸にして、優しき五瓣の白花を著け雄蘂は短く、雌蘂は長く突き出て、稍低回して物思はし氣に咲きつゝあるものは鹿蹄草である。葉は根生葉で、葉柄稍赤味を帶び、葉形圓く、少しく心臓形で、葉肉の厚いところなどは、何處か岩團扇に似て居るやうな俤がある、鹿蹄の意義は、葉形が鹿の蹄に似て居るといふので、古く支那で命じたもので、日本名のいちやくといふのは、一藥といふ義である、即ち此草が漢藥中有數のものであるから、斯いふ名が、何時とな く出來たものであらう、土地によつては、多少方言があるかは知らぬが 觀賞用として、從來花戸の培養する處ともならず、又食用とすべき子も生らぬ所から、空しく山の中の下草として蹈み附けられて了つたので、方言などもない、全く度外視されて、所謂齒牙にかくるに足らずときめられて了つた。併し此草は中々見捨つべきものではない、成る程妍艶たる嬌態はなからう、塗るが如き美色はなからうけれど、楚々たる風姿、韻雅なる趣致に至りては到底紅紫爛開の花壇の草花などの企及する所でないので、今日では古木の盆栽の下草や、庭の捨石のあしらひなどにしたり、又單獨に此草のみの盆栽を造る人が出來始めた、これは元より近來山草流行の結果から、此樣な草も世に出て來たのではあるが、然し此草に持つて產れた韻致が無つたならば、いちやく〳〵と、面皰同志の蜜月旅行の有樣を、言葉を詰めて評する程に持て囃やされる事はなからう。

此草の種類としては、鹿蹄草を始めとして小鹿蹄草、腎葉鹿蹄、紅花鹿

蹄、小葉の鹿蹄、一夏鹿蹄、丸葉の鹿蹄草などある、いづれも鹿蹄草科といふ特殊の分類科條に屬して居る、中にも小鹿蹄、紅花鹿蹄などは盆栽として最も可憐である。

普通の鹿蹄草は、一寸した丘陵で、朽葉の幾年月も拂はれざる處であつたら、何處にてもあるので、東京附近でも、赤羽一體の崖地、市河松戸附近などの森の中へ這入ると、屢々見る事が出來る。然し他の鹿蹄類は少と山地へ入らぬとない。

就中紅花鹿蹄の多いのは富士で、何れの登山口にもあるけれど、須走口の馬返附近太郎坊の邊へ行くと、丸て毛氈を布き詰めたやうに、此草が地に藉さて、瀟洒たる紅花をほのめかして居る、咲いて居るといふのではない、寧ろ仄めかすといふのが適當な形容であらうと思ふ、人面を照すとでも言ひさうな蒼黒の葉の間に、ポツリ〳〵と淡紅く咲き出づるので、其狀恰かも紅玉の輝やきつゝあるが如くである。夫て其邊には、車葉筑波根草や、白花延齢草や、白花蛇苺や、舞鶴草などが、我劣らじと咲いて居るかと思ふと、矢車が大きな葉を傘と伸べて、花毛氈にかゝる霧を防いて居る樣は、曾遊の人が、忘れんとしても忘るゝ能はざる印象である。

一體に此鹿蹄草といふ草は、比較的培養し難い草て、普通の鹿蹄でも、植場所が悪いと能く消えて了ふ、何でも木の葉の腐つたやうな土て、开して成るべく日蔭へ植えるに限るので、若し炎天へ涸々乾にして置いたならば、忽ち木乃伊になつて了ふ、紅花其他のものになると、餘程能く排水を良好にしないと不可ない、然るに此處に困る事には、日蔭を選ん

て木の下などへ置くと、葉末から落ちる雫に根を洗ひ出されるし、蛇苔などに食はれる憂があるから、之をも注意する必要がある。

鹿蹄草は一莖一花を賞するよりも、岩蘚、岩團扇などのやうに、數十百莖簇々として叢れ立つに於て、津々として雅致を生ずる者であるから、一つ二つ處々に置き忘れたやうに植えるのは、可惜此草の詩趣を滅却して了ふのである。

由來妍美塗るが如き西洋草花は、花一輪だけで、充分の美があるけれども、日本の野花は、花其物よりも、草の形と、配置とによつて、野趣を人寰に描き出し、始めて自然の美を掬し得るのであるから、西洋草花に於けるが如き布置では、全然花を殺して了ふ、且つ又今日西洋草花と言つて我邦に喧傳されつゝあるのは、凡て園養の花で、決して彼の地の野花ではない、皆野花を人爲によつて變化さしたもので花にばかり重きを置いたので、終に花の一方にのみ發達したのである。勿論カラジウムとか、アスパラガスとか、偖はアジムタムのやうに、葉ばかりを專門にするものはあるけれども、これとても葉に斗り重きを置いて、兎角一方に偏して居る、夫であるから、壯麗とか、纖綵とかいふ美觀はあるけれども、全く野趣を失つて居る、乍併ら彼方の野花は、矢張野趣の綿緲たる光景を、日本の夫と同じく存して居るので、其栽培の仕方も、自然日本のに似て居る、近來外國にて流行する高山園、又は榮耀に餅の皮の連中の始めた野草會などいふものは、倫敦の眞中、土一升金一升の處で、渺茫たる原頭の風色を弄そびつゝある、詰るところ、野草をあしらつて、大きな箱庭を造るのである、ロックガアヅンと言ひ、野草園といふとも

必竟箱庭の小山水に過ぎぬのであるから、栽植の布置も、其覺悟と心得とを以てせねばならぬ、何も鹿蹄草に就いて特に理屈を言ふ譯ではないが、今日園養の西洋草花に於けると、同じ眼を以て見ると、終に野草の眞價を發見する事が出來ぬのである。

綟摺草

單子葉門　蘭科

Spiranther australis *Lindl.*

綟摺といふのは洒落た名であるが、必竟は「もぢり草」である、花が捻れて咲くので斯くは名けたものであるが、其爲に捻ぢ花、絲卷草などとも呼ばれて居る、又地方によつて左卷と言はれるのは、其花が逆に左から卷けて捻ぢれるからであるが、多くの中には時として右卷がある。詩經の綬草といふのは、此草の事であると言ふ說もある。

此草は蘭科の多年生植物で、實生から能く蕃殖する、一體に蘭科植物は發芽が遲い、或ひは發芽が早くとも、花が遲いのであるが、此草は採蒔をすると、直き芽を出して、來年の六七月頃には早くも開花する、花の色には白、淡紅、紅といふやうにあるが、淡紅が一番多い。

花莖の長いのは七八寸にも達するが、大抵は三四寸で、葉の長さは二三寸、根生葉の中心から花を抽のくので、各地の芝生の中などには、點々として交つて居る、凡て蘭科植物は、烈日の下には堪へ難いものであるが、此草は芝生に交つて居る位であるから、幾くが如き炎威などは少しも此草を屈せしむる事は出來ぬ。

綟摺の花の美しいのは、螺旋しつゝ咲き上る花に、點々として朝露を帶

びて、宛ら眞珠を懸けたるが如き時と、雨新に上り、碧綠猗々として生色を呈する間に、紅露落ちんとして未だ落ちざるの時にある、偶ま佳人の翠帳裡を出て、嬌羞を含むで花を數へつゝあるは、正に一幅の好畫圖であらう、是に至ると、綟摺の可憐なる姿は、楚々たる佳人とよい對照てある。俳人が、『道芝や文字摺咲いて五月雨る』と詠むだのは、能く此草の眞髓を得たものてある。

又此草は蘭科植物に似合はず、培養が容易てあるといふが、最も吾人の友たるべき資格を具へて居る、凡そ水苔、砂礫屑、腐葉土、オルキズビード、偖は透し鉢、二重底などいふ大道具小道具は、蘭科植物に必ず緊要てあるけれども、此草となると、決してさういふ贅澤はいらぬ、寧ろ赤土一點張でも、立派に生育して行くのてある、時によると、隨分粘土質の岩の如き間にも咲き出てつゝある位であるから、園養盆養共に容易なる事は措して知るべしてある。

綟摺には深山綟摺といふのがある、これは花の色が普通のよりは更に鮮かて、孰れといへば、紅紫てある、丈は三四寸て、山草中有數のものてあるが、これは普通の綟摺のやうに、至る處の原野にあるといふ譯には行かぬ、富士、駒ケ嶽、御嶽などは、其產地として聞えて居る、此方は其培養法も、普通の如く容易とは行かぬ、勿論他の難かしい山草のやうなものてはないが、兎に角腐葉土、砂といふやうに、土を合せる必要があるし、又腐葉土が勝つと、葉斗り繁茂して、花が咲かぬなどいふ憂ひがある。

併し此深山綟摺の七八莖を薄い鉢に容れて、恰好な石を添えたならば、立

派な盆栽として、几上を飾る事が出來る。

綟摺の肥料に就いて、曾て工夫を凝した人があつたかのやうに聞き及ぶが、特に此草を大きくするとか、小さくするとか言ふならば知らず、普通に培養して、花を咲かすと言ふ丈なら、特に肥料などを與へる必要はない、始め植ゑた土其儘で澤山である、之に油滓を與へるなどは、寧ろ贅澤に過ぎて、聊か錦衣夜行の形がある。

山鴉草

單子葉門　蘭科

Pogonia ophioglossoides *Nutt.*

普通に鴉草と呼ばれて居る蘭科の多年生草本は之である、此草時として隨分丈の高いのもあるけれども、大抵三四寸乃至六七寸といふ所である葉はスラリとした細い葉で、綟摺のよりは圓みを持つて居る、花は美しい鴉色で、中芯の梢頭に一輪咲いた形は、丸で鴉色リボンの蝶結の雛型を見るやうな氣がする。

此草は山手に多いけれども、又濕地にも生じて居る、富士御殿場の長原の如きには、沮洳の沼の中に、天地正大の氣の凝れるものを仰いで、僅かに嬌笑を呈して居る、東京附近では鶴見邊の山添の崖地などに、澤山といふ程にはないが、其處此處に咲いて居る。

此草の培養は樂ではあるが、綟摺草のやうな譯には行かない、盆養ならば少くも鉢の底に瓦片を布き、其上に炭の粉、夫から腐葉土に少しく砂を交ぜたものを入れ、夫に植え込むのは、最もよい方法である、或ひは水盤へ植込む人もあるけれども、前者の方が安全である。

園養としては、朝だけ日が當る位の綠蔭に栽え、排水を佳良にすれば、翌年消えて了ふやうな憂ひはない。

此花の人に喜ばれるのは、其丈の低いのと、割合に花の大きいのとてあるけれども、夫よりも人の意を牽くのは、花の色の麗しい爲てある。鴇といふ鳥の羽裏が、恰も此花の色の如く、薄紅て一種の光澤がある、其色に似て居るので、此名を得た譯て、艶麗譬ふるに物なしといふべきものてある。或人は鴇草の白花を造り出したかのやうに吹聽された事を聞いたが、白花は如何にも珍らしからうが、然し夫ては幾ら新品でも、鴇の鴇たる眞價を失なつて了ふので、徒らに奇を好むの弊に陷つて了ふだらうと思ふ。

紫草

雙子葉門　紫草科

Lithospermum officinale L.

L. erythrorhizon S. et Z.

紫草といふ名は、古へより有名なもので、例の古代紫の染料になる植物といふ事は誰でも知つて居るけれど、偖觀賞の爲に培養しつゝあるのは稀てある。これは必竟根こそ立派な染料となれ、花は殆んど見るに足らない程の、蕭條たる小さき白花てあるが爲てあらう、夫のみならず、古への濫採の結果かどうか知らぬが、今は山地に餘り澤山ない、假令武の高尾などへ行つても、數十百莖簇々として叢れ咲くといふ光景に接する事が出來ぬ。

此草は根が太き午旁根で、葉が互生てあるが、一面に白毛茸がある、花

は前にもいふ通り、五瓣の小白花で、梢頭に群り咲くのである。紫草といふから花まで、紫であると思ふと、大きに違ふ、草の丈は長じて一二尺、ヒヨロ〳〵と高く伸びるから、風の爲めに地に仆れ伏す事が多い。昔は此草を圃に培養して、其根を肥して染料を絞り出したものであるが野生のものから見ると、其品位が下るので、矢張山野から採集して來たものでなければ、上等の染料にはせぬといふ事である。京都の紫野は、紫培養地の名殘であると言ふけれども、果してどうであらうか、此草は和漢共に染料用として尊ばれた爲に、其名が人口に膾炙され、從つて種々の名がある、紫丹、紫芙、紫莫、地血、鴉咖草などいふのは、皆其漢名で、藐とは古字である、日本には別に根紫と呼ぶ、これは根から紫を製るといふ理屈から出た名である。

紫草は全く盆栽のものではない、勿論老棗駝の妙手であつたならば、何物か盆栽たらざる物あらんやであるけれ共、普通素人の手業としては到底此草を雅致あるやうに盆植する事は出來ぬから、矢張園養の安全なるに如かずである。

根を取る爲であつたら、向陽の地の方がよかろうが、根の爲でないならば、餘り甚だしく日の當らぬ所の方が、生育がよいやうである、土は赤土、腐葉土といふ位で、肥料は油滓などを與へるのは無論よい。

自體紫は江戸の名物で、所謂江戸紫の伊達鉢卷、生〻の髷といふのは男自慢の生粹であるけれども、これは偶ま紫が東漸したので、本來は京都の名物である、詰り紫といふ色は、派手な贅澤な色であるから、文化が開けた處でなくば用ゐられない、實用の色でなく、裝飾の色である

ので、其爲に關東も東夷の時代には紫などといふ事は、夢にも知らぬ位であつたが、夫が德川氏の世となり、贅の贅たる江戸兒の面目を發揮するやうになつて、豪奢の限りを盡したので、紫の株を忽ち京都から奪ひ來つて江戸名物として了つたのである。夫であるから、上等の染になると交通不便な當時でも、矢張京都へ遣つて染さしたものである。

珍珠菜　雙子葉門　櫻草科

Lysimachia clethroides *Duby.*

珍珠菜は其花穗の形から、虎の尾の名が附いて居るけれど、普通に虎の尾と呼ぶところの、兎兒尾苗とは、全く異たる種類で、兎兒尾苗の方は玄參科であるが、これは櫻草科に屬する。珍珠菜が櫻草科といふと、其科の代表植物たる櫻草と、全く外觀が違ふので、變な感じが起るけれども、濱拂子が櫻草科であるが如く、凡ての組織が、櫻草と一致して居るのでどうも、仕方が無い。

此草は各地の野原に自生するもので、東京附近では、六月の始め頃から徐々咲き始めて、七月八月に渡つて、咲き續けて居る、草の丈は二尺位葉は二葉相對し、四葉參差して居る、花は其梢頭に穗狀をなして群がり咲くので、雪の積るが如くに白いのが、八重葎の宿に殊更目を牽くのである、若し一人旅の草臥れて宿借らんと、其處はかとなく辿り歩く畦道逕頭に、岩に凭り崖に望みて、此花の白々と咲き出たるを見ると、徐ろに家鄕の妻子を憶ひ起す、何も此花に限つて、特に左樣いふ情が起るのでもなけれど、花の色が如何にも寂しく、开して沈み勝であるのが、觀

る人をして心細き感じを起させるのである。

此草は性頗ぶる强健であるから、陽地でも日蔭でも更にお構ひがない、又如何なる植溜めの合宿所でも、決して外の草に劣らないで成長する、肥料は淳肥でも下肥でもよい、多く遣れば大きく成長するし、遣らないからとてコッサに乘り出して行く、若し又極めて瘠地であるならば、四五寸の丈でありながら花が咲くから、薄い鉢へ實生の儘にして置くと、翌年になつて三寸四寸といふのが、續々咲いて來る、これが極めて幽趣のある盆栽である。

此草の種類は中々多く、野路虎の尾、澤虎の尾、銀鈴草、宿星菜など皆リシマチア屬である、併し此中では、矢張珍珠菜が見るべきものであらふ。

雙子葉門　薔薇科

委陵菜

Potentilla chinensis *Ser.*

「西日さす濱は柴胡の盛りかな」と、俳人白雄が詠むだのは、此薔薇科の委陵菜であらうか、夫とも繖形科の北柴胡か、南柴胡か、東國柴胡か禮文柴胡かといふ問題を提起して見ると、句意から言ふ時は、どうして も委陵菜でなければ收まらない。

第一に濱といふ特定の場所の有る事、第二に西日さすといふ斷りがある此二つは是非とも委陵菜に無くてならない景物である、夫は此草は海岸

植物であつて、常に濱邊の砂地に生じる事と、燦き附くが如き斜陽を受けて金葩輝やく斗りなるは、常に此草に於て見る處である、外の柴胡では、此「西日さす濱」が、全く術になつて了ふのであるから、人は如何なる説を立てられるかは知らぬが、自分のみは、白雄の柴胡を以て、委陵菜と斷定して憚らないのである。偖此白雄の俳眼に因つて見附け出された委陵菜は、どういふ草かといふと、莖に紅味があつて、葉が小鋸齒のある羽狀複葉で、地に藉いて生へるが、其根は牛旁根の直根で、深く深く地中に潜り込むて居るから、鏝位で掘り探らうといふのは中々困難であるけれども、御方便な事には假令其根が途中で切斷ても、どうやら斯うやら活くから、左樣見捨たものでもない。

花は一寸蛇苺に似て、其黄色が更に濃い、もし金であつたら、青金や赤金ではない、全く生一本の純金であるから、其鮮かさは目も醒むる斗りである。

此草を園養とするなら、砂質の土でなくともよいが、日當りの極くよい所が必要である、盆栽ならば、砂質壤土で深鉢へ懸崖に造ると、花莖が下へ垂れながら、花だけ首を擡げて咲くから、壇上の粧飾として爛美を極める、且つ花期の長いのは、此花の人に喜ばれる原因であらう。

實生は餘り醱酵物の多い苗床や播種箱などへ蒔き附けるよりも、砂へ蒔いた方が結果がよいさうである、併し播種箱でも、發生の惡い事はあるまいと思ふ。

委陵菜の屬は、外にも澤山ある、醋白草、三葉醋白草、狼牙草、或ひは岩金梅、千島金梅、皆ポテンチァ屬であるけれども、就中廣葉の委陵菜

が、一番能く似て居る、東京附近で其産地はといふと、電車で一寸羽根田へ行つても、もう此草があるから、半日の清遊の序に、一株を手巾にくるんで來ると直ちに立派な盆栽が出來るのである、風薫る伊豫簾の下に金葩玉翠の委蛇する樣は、優に濃艶の粉飾を瞠著せしめる。

野　豌　豆

雙子葉門　豆　科

Lathyrus maritimus (L.) *Bigel.*

ver Thunbergianus *Mig.*

長汀曲浦の浦曲の畑、依稀として動かず、松長へに青く、砂愈白き渚を徐歩すると、板金剛の先に纏る優しい花がある、了度畑に造る赤豌豆の花の稍小さいので、草の容も酷く似て居る、只異るのは、彼のスラリと伸びて居るに比して、此の葎の如く生ひ繁つて居る事である、併し其スラリとしないのが、一入此方の畑に向くのである。

此草は何處の海岸へ行つても、澤山に野生しつゝあるので、時に白花の品に接する事があるといふが、自分が白花を見たのは、花戸てばかり、野生では一度も接した事がない。

此草の蕃殖法は、實生がよい、花後に矢張普通の豌豆のやうな莢が出來るから夫を採つて置いて、秋季に播種する、夫で自生地は海岸の砂地であるけれども、採集して來て栽えるには、赤土でも黒土でも、結構である、只排水を良好に融通するやうにすればよいのである。實生も又然りて、敢て砂を選ぶといふ必要はない、肥料は乾鰮がよいけれども、他の肥料假令ば淖肥でも結構である、成るべく炎天にさへ出して置けば、秦

秦として茂生し、楚々として花を着けるが、もう陰地であつたら、到底物にならぬから、大いに心しなければ不可ぬ。

此草は園養か、果た盆養かといふと、萎弱たる草容は、無論後者に屬するもので、園養で這ひ廻らせるよりは、盆養で懸崖の鉢溢れにしたのが最も風情に富むのである。勿論素燒の瓦鉢では一向に風情はないが、灰白色の藥をかけた圓筒狀か長方形の鉢を選ぶと、葉の蒼綠と、花の紅紫とが、鉢の灰白色と照應して、立派に鍔鈿壇上の覇たらしめるに足るのである。

濱皺子花

雙子葉門　旋花科

Calystegia Soldanella R. Br.

「皺子花や赤子の夢に這ひかゝる」と、俳人の腸を絞らせたる皺子花の夫と同じく、夢の如くに淡き花の色は、浴後の美人にも喩へつべく、其一點賦粉の氣なき處に、美の眞價は認められるのである。

矢張普通の皺子花の如く旋花科に屬するが、花は彼よりも大に、葉は厚くして圓い、开して海岸の砂の上に、一面に蔓びこりつゝあるので、其烈日の炎威にも屈せず咲き誇る時には、恰も陶製の盃を列べたやうな觀を呈する。

此草は濱邊の砂の中に深く根を下して居るから、之を掘るといふのは、中々容易ではないが、併し委陵菜よりも猶手輕く其根を扞して活くから採集者は骨を折つて、根を十分に掘り取る必要はない、开して深鉢へ砂交りの土を以て植ゑ置けば、忽ち根づくのである。

園養は敢て地質を選ばないが、砂地に植ゑたのは、能く花が咲くやうに思はれる、砂地でないのは、徒らに莖葉が冗長する嫌ひがある、思ふに砂地へ植ゑて、肥料を多く行るのが、成蹟が宜しからうと思ふ。

山小菜　桔梗科

雙子葉門

Campanula punctata *Lam.*

螢袋と通常言はれて居る山小菜は、方言提灯花と呼ぶところが多い、必竟其花が大きく、夫て嚢狀であるから、此名を獲たのである、色は白、紅紫、薄紫など種々ある、盆栽的風致には乏しいけれども、野花として此位花の大にして美なるは少ない、園養として優にカンタアバリイベルの壘を摩するものである。

これは海濱植物ではない、重に山野に自生するもので、東京では目白目黒附近に澤山ある、且つ此草は一二莖悄然として立つは少く、大抵數十莖其附近に點々として居るから、花の盛りには、頗ぶる見るべきである。

此草は頗ぶる强健は性質で、何處如何なる所に生へて居ても花をつけるが、若しも砂礫磊磈たる處で、肥料氣が少しも無いにしたところで、矢張寸寸にして花を著けるから、小盆栽として面白いものが出來る。

草の丈は能く成長して二尺位、葉は鋸齒があつて、楕圓形をして居る、夫でいづれも枝を打たないで、垂直であるから、盆栽の風致に乏しいが園養して置くには、妙である、地質は赤土に腐葉土交りなどは、最も能く適したもので、陽地でも陰地でも一向にお構ひがない。

滁州夏枯草

雙子葉門

Prunella vulgaris L.

夏の始めに山の裾や野の逕、偖は田の畦などを行くと、紫色で唇形をした畸形な花の咲いて居るのを見る、これは滁州夏枯草で、其花穂が矢の靫に似て居るから、此名を得たものである、東北地方では、此草の事を甘草と呼んで居る、夫は此花穂から一花を抽き取つて、其元を嚙むて見ると、蜜の味がするからであるさうな。夫かあらぬか、村童が頻りに此花を摘つゝあるを見た。

滁州夏枯草は小さいのは愛らしいけれども、餘り成長して伸び過ぎると四方八方へ蔓の如く枝を延して、思ひもよらぬ遠方で花が咲いたりするので、餘り嬉しいものでもないが、鉢に植えて詰めて拵へると、懸崖狂々の狀に言はれぬ趣きがある、然し此草は乾いた向陽の地か好きであるから、水が切れると直き首を垂れて了つて、其上水に乏しいと、忽ち下葉が上る憂ひがある、此草の下葉の上つたのは、實に見るに堪えぬから、盆養者は大いに注意せねばならぬ、花の色は紫が普通であるが、稀に白花がある、然し其白色が雪のやうに皎潔でなく、安胡粉のやうなコテ〳〵であるから、吾人は矢張紫色の方に與するのである。俳人某の句に『涼風や足にからまるうつぼ草』といふのがあるが、初夏山莊に俗塵を避けて、綠蔭に自適する時の實景を詠み得たものである。同じ屬なるタテヤマウツボグサは此花より更に美しい。

雙子葉門　蓼科

Polygonum Bistorta L.

伊吹の名を冠すると、何か高山植物の珍品のやうに聞えるけれども、此草は昔から堀切下千葉邊で、切花として造つたもので、今こそ色々な美しい西洋花が出來たから、如此ものは疎外されたけれども、數年前までは盛んに東京中へ切り出したものである。

これは蓼科の多年生植物で、箆のやうに長い葉、鎗のやうに直立した花莖、雪のやうに白い花穗など、濃艶の態度こそなけれ、清洒の趣致に富むので園養としては餘り見る程のものではないが、盆裡に植ゑて矮蹙せしめて花をつけると、寧ろ紫參にまさる趣きがある。

此草に伊吹を冠したのは、江州伊吹山で始めて發見したからであるさうであるが、其發見も決して新らしい事ではない、植物學などといふ考へでの丸でない時代の事に屬するのである。

此草の用土は、腐葉土に眞土がよい、夫て土が固く緊縮せず、フカ〳〵と柔らかいのを喜ぶのであるが、盆養て小さく作るには、少し砂氣を交らして、表土が稍堅目位が、適當して居るやうてある、失て鉢が深いと從つて根も充分張るので、丈も高くなるといふ理屈であるから、成るべく薄い鉢がよい、若し已なく深鉢を使用するならば、半分程炭の粉を入れて置くがよかりう。

馬　棘

Indigofera tinctoria L.

馬棘は、木藍、紅藍などの名がある、本來日本の原產ではなく、往古に

舶載したものであるが、夫が現今では邦産同様になつて了つたのである大犬ふぐり、野幌菊、ひめじよん、詰草などいふのも、矢張外國のであるが、西力東漸の結果、今では日本の原野を壓仆して居る、どうかこれからは東力西漸を行つて見たいものである。

此花に於いて、英國の侍從武官エドワード、ミルンといふ人の百花の記に、面白い記事が有る。

太古天に在る星の神にリームと呼ばるゝが、月の宮居の姫君を戀ふて、心籠めたる花環を送りたるに、姫は他に契りたる神のあるものから、リームの花環を、見るも汚らはしと擲ちたれば、紅白紫黄燦爛として飜へり、蝶の舞ふが如くに下界へ散り失せぬ。リームは之を見て、痛く己れの恥かしめられたる事を憤ふり、姫を捉へて打ち叩きければ、ジャピタアの神は之を聞きて、彼等の漫りに天上を騒がしたる事を怒らせたまひ、二人を召して、一人は姫を打ちたる罪、一人は密夫を設けたる罪をもつて、共に下界に追ひ下したりき、然るに嚮に姫の擲ちたる花環の散りたるものは、化して馬棘の花となり、紅と白とに咲き分かれぬ、斯て天上を追はれたる二人の魂は、一は紅花に宿り、一は白花に入りて、長く歸り昇る事を許されず、されども二人は猶も仲悪しければ、紅花と白花とは、長へに相交はる事なく、一處に咲き出づる事なし（園藝文庫）

といふ古譚がある、日本でも白花があるけれども、紅花に比して至つて少ない。伊太利の花詞では、此花を以て戀の破れの意を代表せしめて居るから、戀情を謝絶するには、此花を襟へ挿したなら不言不語にして拒

絶の意である、迂濶襟にさして、臍を嚙むの悔を殘されざらん事を。

此草は園養とするよりも、盆栽とするがよい、盆栽ならば無論懸崖である、太き株から咲き下る風情は、反つて胡豆よりも趣きがある。

胡豆は日本に昔から野生したもので、これも各地の原野畦畔などにある馬棘と同じく荳科で(Indigofera decora Lindl.)といふ學名である。又庭藤の名もある、花の形が一寸藤の花に似て居るからであるが、昨今は花戸で澤山盆栽に仕立て居る、これは紅花より白花の方が眺矚に値へする、馬棘、胡豆、共に亞灌木であるから、腕次第で立派な盆栽が出來るといふものである。

夫から談馬棘に戻るが、此花を園養するには、普通に花壇などへ植ゑるよりも、捨石に添えたり、假山の土止めを兼させるがよい、根が縱横に延長するから、兩用兼備はるの利がある。

木芙蓉　雙子葉門　錦葵科

Hibisicus matabilis L.

芙蓉とは本來蓮、即ち荷花の事で、富士山を芙蓉峰といふのも、必竟靈峰八朶の頂、恰かも蓮花の如しなどゝいふ處から命けられたのであるが此木芙蓉も、又其花が蓮に似て居るといふ處から、木の字を冠して、此く呼び做されたもので、猶牡丹を木芍藥といふのと同じである。

然し今日では、木芙蓉といふのが、餘り長く、語調が宜しくないので、何時しか木字を省略して、單に芙蓉とのみ呼ぶやうになつた爲に、本家の蓮の方の芙蓉は滅却されて了つた、夫で此木字を省略したのは、氣

の短かい日本人が、エー面倒だといふので、首を刎つて了つたものかと思ふと、決して左様許りではない、本家の支那でも、元明時代には、疾に此斬首の惨刑を加へて居たもので、申時行の詩に、單に芙蓉と許り題して、斯ういふのがある。

群芳搖落後。　秋色在林塘。　艶態偏臨水。
幽姿獨拒霜。　漢皐霞作佩。　湘曲錦爲裳。
白首滄江上。　相看醉夕陽。

此詩は慥かに木芙蓉を詠じたもので、或ひは普通の荷花のやうにも解されるけれども、拒霜といふのは、此花の一名で、宋の楊萬里が拒霜花を詠ずる詩にも。

木蕖何似水芙蓉。　同箇聲名各自都。
風露商量借膏沐。　胭脂深淺入肌膚。
喚回春色秋光裏。　饒得紅妝翠蓋無。
字曰拒霜渾不惡。　却愁霜重要人扶。

とあるのでも解る。

これで見ると、支那でも疾くに此花を單に芙蓉とのみ呼んだものであるが、然し日本で芙蓉とのみ呼ぶのは、支那の略稱をまねたものであるとは、俄かに斷言する事は出來ぬ。

木芙蓉は錦葵科に屬するもので、扶桑花 *Hibiscus rosa-Sinsis. L.* などは、頗ぶる之に近い花である、我雅名は、はねずばな、山なしの花、庭ざくら、ざくろ、露草、唐棣花、にはうめ等幾らもあるが、其中には、必らずしも木芙蓉ではないと思はれる者も少くない。

凡ての錦葵科植物中、此花の如く美なるのは、餘り多くあるまいと思はれる、艶冶とか、又妖冶とかいふ形容詞は、實に此花の爲に出來て居るやうである、況して八重の醉芙蓉になると殷紅燃ゆるが如き美は、筆にも口にも著はし得ぬ、芙蓉の芙蓉たる點は、實に此艶麗なる點にあるけれども、清洒皎潔の趣きになると、白花の者を推さねばならぬ、白と紅とは、如何なる花に於ても、果又他の染色類に於ても、常に積極と消極とを顯はして居るけれども、此芙蓉の花ほど、餘りに甚だしい双對をして居るのは無い、丁度艶色國を傾くる美人の寵を恣まにする時を以て、紅花の夫に比すれば、白花のものは、年衰へ寵を失して、落寞として柴門に無常を唧つ末路にも比すべきである、然し前者は紅粉錦綾を借りて其美を粧ひ、後者は膩粉を洗ひ去りて何等の裝ひも凝さぬのであるが、同く同一人であつて見れば、天生の麗質に於ては、少しも變ずる事はない、のみならず、後者の方は反つて天眞爛漫たるを見るのである。

此花は甚だ移植を喜ばぬものであるから、花期に方りて、俄かに鉢に移さうとか、花壇に栽えやうとかいふ事は、甚だ不可であるから、始めから適當の方法を取つて置かぬと困る事がある、元より花後葉の謝した後ならば、何處へ動さうと一向差支へはない。

紫苑

雙子葉門　菊科

Aster tatarcus L.

「隣同士物も言はせぬ紫苑かな」と、才藻たよ女の句は、實に能く紫苑の性質を道破したものである。此草は常に亭立するもので、丈高さは一丈に

も及ぶ、夫であるから、我等の如き軒低き茅屋の隣同士、榮肴の相談さへ聞えるといふ家でも、隔ての境に數十莖叢生して居る時には、立ち上つても、隣人の顏も見えぬ、まさか聲の聞えぬ事もあるまいが、顏が見えなければ、噺も物足らぬので、十言のものは、一言すら語らぬやうになる、優しき女俳客は、實に這般の極致を發見したものである。

紫苑の漢名は青苑、夜牽牛、紫蒨、返魂草、和名はのし、鬼の醜草と呼ばれて居る、花は紺菊などのやうで、秋の千草の中では、實に有數の花である。

歌聖紀貫之の歌に。

かざすとも立に立なん無名には、
事なし草の甲斐やなからん

とある、其事なし草の事は、此紫苑をいふので、昔避魔の呪ひとして、此花を折りて殿上の簾に挿み、或ひは冠の簪しとしたので、翳すとも立に立ちなんと、貫之卿が少し皮肉を言はれたのであつた。

紫苑は其名の如く、花が紫であるけれども、紅紫鮮娟といふよりも、淡紫清艶の趣きがあるので、從つて一見目を眩すの慨はないが、幾ら見ても見ざめのせぬところが、此花の身上であらう、別に黃苑といふものが山地などへ行くとあるが、これは花の黃なるところから、紫苑に對して命たものである。

紫苑には又忘れぬ草といふ名がある、これはどういふ處から起つたのであるか知らぬが、今昔物語に斯ういふ事がある、夫は支那の古譚を取つたのだといふが、一寸面白い。

昔人の親、兄弟二人の子を持てり、此兄弟は極めて孝心篤き者にて、いづれ劣らず親に事へたりしが、偶と時の疫を憂ひて、藥石の効も無く親なる者は失せにけり、されば二人の歎きは譬ふるに物なく、共に死なんと斗り泣き悲しみしが、斯てあるべきにあらねば、漸く死屍を葬り、標を立てゝ、在すが如くに毎日詣でけれども、悲しみは中々に去らず、愈々愁ひの雲の蔽のみなり。然るに兄なる人は公の宮仕ありて、私の歎きの爲に、二六時中親の墓に詣づる事は難く、詣でざれば心安からざるを以て、倩ら思ひけるやう、忘れ草は物の思を忘るゝものなれば、我思の薄らぎ行くよすがもあるべしとて、終に塚の邊に萱草を栽えたり。然るに弟は痛く兄の心を恨み、親を忘れんとするは淺ましと喞ちしが終に又紫苑を採り來りて、こは忘れぬ草といふ名あれば、我は之を栽ゑて親を忘るゝ事なかるべしとて、塚の上にと栽ゑけり、然るに果せるかな、兄は何時とはなしに親の上を忘れて、詣づる事も稀になりたれば、世に萱草を忘れ草といふ事の誠に印ありとぞ覺ゑける。

弟は忘れぬ草を栽えたる事なれば、益々親を慕ふ事厚く、日となく夜となく、塚の邊に詣りたりしが、或夜塚の邊に朦朧たる白氣あり、磅礴として低く垂れたる中に、形は見えねども怪しき聲ありて、我は君の親の塚を守れる鬼なり、君が兄は忘れ草を裁えて歎きを忘れ、公に事ふ奉る心を怠らず、其家を思ふ事、親よりも身を思ふにあるべし。君は忘れぬ草を栽えて、親を思ふ心益々怠らざるは誠に至孝とすべし、故に天帝君を哀れみ給ひて我をして言はしめ給ふには、今より後、明日の晝にあらん事は、夢もて夜の間に知らしむべしと言ひ終るかと見れば、冥風

冷やかに吹きて白氣散じてけり、弟は不思議の事に思ひて家に歸りたるが、果して其夜より明日の事を夢に見るに、目覺めて後露違はず、思ひの外なる德を得しとぞ、されば此紫苑は一に思ひ草とも呼び、嬉しき事あらん人は植ゆべきも、歎く事あらん人は植ゆ可らず、猶且つ鬼の敎へを受けたる草なればとて、之より人呼びて鬼の師子草と云ふとぞ。然るに袖中抄には又下の如き說がある〳〵

鬼のしこ草とは別の名にあらず、忘れ草は愁ひを忘るゝ草なれば、戀しき人を忘れん料に、下紐につけたれど、更に忘るゝことなし、忘れ草といふ名は只事にやありけん、猶戀しければ、鬼のしこ草なりけりといふなり、心は誠の鬼にあらず、わろしといふ詞なり、日本紀第一に、不凶也凶目汚穢之所云々とあり、しことはわろしと嫌ふ詞なり、凶の字によめり

とある、古への異名の詮索は是に止めて、萬葉の家持朝臣の歌のあるを以ても、紫苑が古より我詩人の眼に映じてあつたのが解る。

萱草吾下紐爾看有跡鬼乃志許草事仁思安利家里

猶盆栽用として、姫紫苑があるが、頗ぶる愛すべき花である。

鷄冠　雙子葉門　苋科

Celosia cristata L.

秋の花に鷄冠あるを忘れてはならぬ、此花は少し支那臭い、寧ろ唐畫臭い代物であるけれども、此花が無いと、秋の日のイラ〳〵するのが薄いやうな氣がする、秋の日の得色は、此花に映じて、始めて發揮さる

ると言つてもよい。

口の悪い許六は、「鷄頭は和らぎの無き花なり、よからぬ女の、一筋に貞女を立てたるが如し」と言つて居る、隨分飾りの無い口氣ではあるが、全く其通で、楚々嫋々などいふ趣きは全く無い、何時も眞直に頑固に突立て、人が招んでも振り向きさうにもしない、誠にお愛想の無い花ではあるが、花圃に咲き充てる時には、中々壯觀である。

鷄冠といふのは、字の如く、莖上に簇開する花の形が鷄の肉冠に似て居るので、此字を用ゐたもので、西洋でさへも、コックス、コムと言つて居る位、東洋人が見ても、西洋人が見ても、變りは無いと見える、若し種鷄場へ行つて、薇薔冠レグホーンなぞいふ鷄を見ると、如何にも其肉冠が、此花に酷似して居る。

鷄冠の和名はあまり聞かない、延喜式にみつそゝきとあるのは、此事だといふがどうも、判然せぬ。とさかくさと言つて歌に詠んだのがあるといふ事だか、餘り直譯に過ぎて、何だか當にはならぬ。本來支那邊から輸入されたもので、ズッと昔は日本に無かつたものである。

此花はどういふ者であるか、餘り人に嗜かれぬ、醜くても貞女ならよかりさうなものに、矢張浮氣でも美人がよいと見えるのか、所在の庭園に多く見かけぬ、夫は單に許六が悪口を言つたのが素因となつたのでは無い、誰が言ひ出したのだか、鷄冠を植えると、其家に疫病が絶へぬと言ふので、斯く忌まれるので、此花の身に取つては、寃も甚だしい。其代り寺院の庭や墓地では、澤山植えて置いた者で、廢寺落寞の景を描く時には、能く遣はれる、然し今日では誰もそんな說を用ゐる者が無いので

大分秋草の花壇に植えられるやうになつた。

此鶏冠には、澤山種類があつて、紐鶏頭、杉鶏頭などは、最も秀て居る鶏冠の色は赤が普通であるけれども、又黄、白、時として紫がゝつたのもある。

青葙（Celesia argenten L.）といふのは、野生の鶏冠で、漢名野鶏冠、萋蒿、崑崙草、草蒿、鶏冠莧と言ひ、和名をうまくさ、又あまくさと言ふ其うまくさといふのは、馬糧になるから言ふとの説もあるが、嫩苗の時人が食料に供すので、其味の甘いところから、あまくさ、うまくさなどいふのだとも言つて居る。青葙の蔬なぞは、オツな肴ではあるまいか山野草の陳列會でもした時には、是非酒の肴に出すべきものである。尤も鶏の肉冠は、表皮を剝いて、酢をかけて用ゐる料理法があるから、種鶏家の方が、餘程凝て居るかも知れぬ。

雁來紅　雙子葉門　覆科

Amaranthus gangeticus L.

例の清少納言が「かまつかのはな藺たけなり、名ぞうたてけなる、雁の來る花とぞ、文字には書き」と枕の草紙に書いたるは、此雁來紅であるして見ると、此頃から已に日本に傳來して在つたものと見える、清少納言は一條院天皇の皇后定子に仕へた才女であるから、少なくとも今を距る八百四五十年前、其頃にもう渡來して居た者であるから、今では我邦産と言つてもよからう。

漢名は、老少年、十樣錦などであるが、之は變色の色彩によつて名けた

ものらしい、和名は前述のかまつかの外、藻汐草にはかきつか花とあるけれども、恐らくかまつかの傳寫の誤りであらう。其外には通稱の葉鷄頭の名があるのみ。

雁來紅は所謂觀葉植物に屬すべき者で、花と言つては、誰も知る如く誠に詰らないもので、花がある爲返つて汚く見える、甚だ畏多い比喩であるけれども、觀世音菩薩の靈像に、草鞋を打つかけたやうで、其爲に尊嚴を汚すのは如何にも殘念であるが、此汚ない花でも、無ければ蕃殖する譯に行ぬのであるから詮方が無い、夫にしても、葉の美なるものには、多く花の美を與へない、天二物を與へずといふのは此事である。此草も充分に成長して葉が美觀を呈する頃になると、移植するのは甚だ困難で、寧ろ不可能と言つてよい位であるから、栽培するには、始めから適當の位置を考へて置かぬと、後悔するやうな事がある。

前條に紐鷄頭とあるのは、又の名藤鷄頭で、學名 *Amaranthus paniculatus* L. といふもの、これは名の如く、莖上の花が紐のやうに振下つて、長さが五六尺にも及ぶので、紐若くは藤の名があるので、花として美とは言ふ可らざるも、又左樣捨てたものでもない、然し鷄冠花の花でさへ醜き貞女といふ位の許六に見せたら何といふだらうか、此貞女の道樂息子位に見立てるが落ちてあらう。

薄

草子葉門　　禾本科

Miscanthus Sinensis *Anders.*

薄（Miscanthus sinensis.）は即ちすゝきである、俗謠に「露は尾花と寢たと

いひ、尾花は露と寢ぬといふ、尾花が穗に出てあらはれた」とある、其尾花は薄の花のほうけたものをいふのである、萬葉集山上憶良の「はきがはなをばなくづばなをみへしなてしこのはなふぢばかまゝたあさがほのはな」と、秋の七草を咏んだ第二のをばなる者は、此薄の花である。既に七草の一であつて、萬葉集にも選ばれて居るといふ事になると、歌道に取つては容易ならぬ事であるから、古來其詮議はやかましいが、併し幸ひ牽牛花や蘭草や萩のやうに、七面倒な議論は起つて居ぬ。古來芒に薄の字を充てるが、薄は爾雅にも「薄草叢生也」薄。又曰芒とあるから、必竟草の簇生して居るのを凡て薄と言つたもので、赤染右衞門集に、なてしこの薄になりたるを見てと題して。

生ひかはるこや撫子の花すゝき招かば人もゆきて見つべし

といふ歌がある、是がよい例證で、才女の淵叢と言はれた當時でさへも猶すゝきとは今の尾花をいふのではなく、何でも草の叢生して居るのを言つたものであるらしい。然るに此尾花は、必ず叢生するものであるところから、すゝきの尾花と言つて居た者が、何時しか草其物が薄と命ぜられ、花を尾花と稱し、葉と花と二つの名が出來るやうになつたので、注意して古今の和歌を調べて見ると、首肯する事が出來る。

今日普通野生する薄は、所謂鬼すゝきで、葉邊刃の如く、過つて曳くとひどく手を切る事がある、庭へ栽えて置くのは、小兒などに取つて、ちと危險といふ虞が無いでもない。

鬼薄に次いでは糸薄、園藝上此薄が一番美しい、葉が細く、恰も糸のやうであるから、此名が出來た譯である、夫から鷹の羽薄、葉に鷹の羽

のやうな白斑があるから呼ばれるので、丈の高い立派な薄である、又常盤薄は、常盤といふけれども左様は行かぬ、矢張冬分になると大抵枯れるが、これは下の方から枝を打つのが特色である、然し餘り長大なので盆栽には兎てもならぬ。紫すゝきは高山に生ずる紫褐色の薄で、盆植に面白い。

薄には異名が多い、岩薄、くろふ薄、もとあらの薄、篠薄、露曾草、敷波草、みだれ草、袖波草、袖ふり草、みぐさ等皆優からぬはない。

由來薄の名所なる者は、昔から武藏野と極つて居る、今日東帝國の首府となつて、世界の耳目を玆に蒐めて居る紅塵萬丈の衢は、實に當年の薄の名所であつた、今市中を歩いては、薄は愚、草一本も得る事は出來ぬが、手近なところで、目白、代々木、池袋の邊へ行けば、まだ〳〵其處にも此處にも薄原が殘つて居る。秋曉鈴を此間に曳くと。「武藏野を今日はな燒きぞ若草のつまもこもれりわれもこもれり」と、飛んだ業平氣取の御連中に出會す事がある。薄も中々粹な歴史を持つたものである、さうかと思ふと、飛鳥山名物として、枯尾花てみゝづくが出來て居て、無邪氣な子供の手遊ともなる。枯尾花と言へば、幽靈の正體見たりと言ひ度なる、實に薄は色々の方面に用ゐられるものである。然し露と寢る位は大目に見るが、枯尾花となつて人を嚇すなどは甚だよろしくない。

薄に就いては、まだ斯ういふ噺がある、是は歌人寧ろ歌聖と迄崇める人のある登蓮法師の事であるが、若し事實とすると、吾人の風上にも置けぬ代物だ。夫は十寸穂の薄の理由であるが、無名抄に。「或日雨の降りたる徒然は、歌の友垣相集まりて、古き事ども語り出たる時、或人の偶と

ますほの薄とは如何なる薄をいふならんと言ひ出てたるに、一人の老人ありて、斉は渡邊といふ處に、能く其理由を知れる聖ありと聞き侍ると言ひ出てたり。偶ま座に登蓮法師在りたるが、窃かに此言葉を聞きて、稍暫らく案じたる樣なりしが、俄に容を直して、簑笠を暫時貸し玉はらずやと主人に乞ひければ、主人は訝かしと思ひながらも、又しても此法師が興がる業するよと思ひて取り出てたり。然るに坐にありたる者は餘りに怪しく思ひて、交も其故を問ひたるに、法師は眞顏になりて、予は之より渡邊といふ處にまかるなり、ますほといふ事を、年頃訝かり思ひたるに、知れる人ありと聞きて、爭て尋ね行かざらめやといふ。人々驚きながらも、さるにても雨の止むを待ちて出立給ふも遲うはあらじと諫むれば、法師頭を左右に打ち振りて、偖々果敢なき事を言ふものかな人の命は雨の晴間を待つものかはと斗り言ひ棄てゝ出てにけり。斯て思ふ如く事の由を聞き得て、いたく秘しけるが、此事三代の弟子に至りて世に聞えたり、ますほといふは十寸穂にして、穂の丈長く尺に餘れるをいふものにて、彼のます鏡を萬葉に十寸の鏡と書けるにても知るべしぞ。」十寸穂の理由を聞いて、三代秘し隱しにして居たなぞは、餘程氣がふれて居る。

野百合

雙子葉門　豆科

Brotalaria sessiliflora L.

薄を書くと是非狸を想ひ出ず、狸といふと、忽ち野百合を聯想するのは免かれない。此植物は名が道化て居る斗りでなく、花も人を馬鹿にして

居るところが可笑しい。

古今日本詩人の眼界は、中々廣い、益母草のやうなものや、力草のやうなものさへ、捕捉して詩題として居るけれども、流石に此狸には一抔食はされて居たものと見えて、野百合を詠じたものはない、只松田竹蟭氏が長野新聞社に居たころ、此植物を課題として俳句を募り、同氏と、礫川九華氏とで選んだ事がある、これが抑も野百合が風騷の客の口の端に上された始めであつたけれど、惜い事には、地方の新聞であつた爲に、廣く全國に擴まらずして了つた。

野百合は所謂柳葉で、草の丈尺前後、肥えたのは能く枝を打ち、其梢頭に花を著ける、花は紫色で、苞が毛だらけである、恰度緒〆の狸のやうな形であるから、人が斯く呼んだものであらう、漢名の野百合は植物名實圖考に見えた名である、日本には外に名が無いやうである。

此草は一年生であるから、年々實生にする面倒があるが、栽培すると中〻可笑しみがある。東京附近では上總邊に澤山野生して居るが、近く道灌山附近にも、無數叢生して居るのを此頃發見した。但し遼東の豕であるかも知れぬ。

狸豆を書くと、又狐豆を持出したい、狐豆は今いふ啖切豆で、又巾著豆學名を Rhynchosia volubils. Lour. といふ、能く野原や藪などに纏まつて居る蔓草で、花は黄のやうな、紫のやうな、一向氣分が引立たないといふ風なものである、此一種の紅皮啖切豆といふのは、實が稍薄紅いので、少しは見られる。

萩

雙子葉門　豆科

Lespedeza bicolor. *Turcz.*

何だか秋の七草の講釋をするやうではあるが、萩は初秋の花卉として、先づ五指の中に入らねばならぬ、本來萩といふ植物は、其一花を摘むでも、又其一葉を手に取つても、餘り感服する程の者ではない。然るに其花と葉とを、彼の細い莖に附けて、數十百莖、所謂薄に生ひ茂げらせると、忽ち詩趣津津として湧くといふ次第、くねるとか、うねるとかいふ媚かしい姿は、實に此花の特色である、『露もこぼさぬうねりかな』といふのは、能く這般の情致を描き得たもので、敬服の外はない。

萩は漢名胡枝子、隨軍茶、觀音菊、天竺花などいふ、其の種類も中々多く、木萩、丸葉萩、著萩、猫萩、犬萩、蒔繪萩など皆此類である。

萩の名所として古來聞えて居るのは、無論奥州の宮城野、此地名は慥かに萩の爲に有名になつたもので、更に奥州白石噺からも俚耳に這入たらうと思はれる。此宮城野は、今仙臺の直ぐ側になつて居て、第二師團の練兵場にされて居る、然し昔しは此邊一體に宮城野と稱されて居たもので、青葉山は其間の一丘阜であつたらう、無論仙臺の俤とも思はれる村落すら無かつたのである、能因法師が、『秋風ぞ吹く白川の關』と、居ながらにして名所を知つたか振して居た頃には、定めし露の萩原咲き亂れて、其間を旅客が孤影茕々として行く姿など、實に秋の哀れを此處に集めてあつたらうと思はれる。今も當時の名殘として、奥州一帶に萩は多いが、特に此邊が濃山ある、松川に汐を浴び、松島に月を掬む人々は其序に古への名所の殘骸を弔ふも、又風流といふものであらう。

萩の異名は、鹿鳴草、空萩、玉萩、もとあらの萩、萩が花妻（鹿をいふとも言へり）野守草、初見草、庭見草、古枝草、秋遲草、濃染草、月見草等、いやになる程澤山ある。

清少納言は、萩を見て斯う言つて居る。「萩はいと色ふかく、枝たをやかに咲たるが、朝露にぬれて、なよ〳〵とひろごり伏したる、小男鹿のわきてたちならすらんも心ことなり」と、流石は女だけ、優しい言葉ではあるが、女でなくとも、萩に向ふと、斯く優しい言葉を出して見度なる。

蘆

単子葉門　禾本科

Phragmites longivalvis. *Mig.*

蘆、葭、一物にして、善惡兩面の名を以て居る、外面如菩薩、内心如夜叉といふのは當るか當らぬか知らぬが、我日本刀は、殺人活人の靈劍であると同じ事だ。

漢名葦、葭、蓬農などいふ、其字義に就いて、斯ういふ説がある。『初生曰レ葭、未レ秀曰レ蘆。長成曰レ葦』と、或ひは其の邊の事もあるもか知れぬ。

何しろ秋老いて、長江紫水の邊に行つて見ると、兩岸の蘆は綿のやうな穂を被つて、所謂稻葦竹麻と生ひ茂つて居る、目の行く限り、蘆の穂ならざるはなく、銀の如き水は其間を縫ひ、然も欹帆の風を孕む趣きは、此處斗りに秋が來て居るかとも思はれる。

足利將軍義昭が、敵の爲に逐はれて、琵琶湖に逃れた時、風さわぐ葦の亂を見て、萬感交も臻り、憮然として長嘯した詩がある、いや、詩と言

つたよりも、此處では唐歌と言つたはうが哀れに聞える。「落ニ魄江湖一暗結レ愁。一夜湖上夢悠悠。天公也憐ニ吾生一否。月白蘆花淺水秋」と、上將軍の權勢を以てし、終に湖心の窮客となるに至つた時、月明かに秋長けたる晴夜、水に漂よふて蘆花の間に彷徨するといふ事になつたら、弱い音も出て來るてあらう、蘆の花といふものは、詩趣のあるだけ、一入人を寂しがらせる。

我異名は、難波草、氷室草、忘れ草、さゞれ草、玉えさ草、よかす、難波女、などいふ。其證歌なども實に腐る程澤山ある。

蘆には、まだ斯ういふ逸事もある、夫は三好長慶が飯盛城で客を集めて聯歌を催ふして居た時、或人が

薄にまじる葦の一叢

といふ句をつけた。此時恰かも長慶が續ぐべき順であつたが、會ま其弟の實休が、畠山實政と戰ひて戰死したといふ報が來た、これが心得の無い武士だと、顏の色も變つて、歌も何も滅茶〳〵になるのだが、長慶は有繋に泰然として動かない、緩々筆を執つて。

枯澤の淺き方より野となりて

と、遣つて退けて、偖弟が戰死したからと、一坐に斷り、兵を提げて戰敗の餘を受けに立つたといふ。蘆はどうしても、詩に緣のある植物である。

Pueraria Thunbergiana. *Benth.*

葛も又寂しい花であるけれども、秋の花として、無くてならぬものゝ一つである、無論七草の一に收められてはあるけれども、收めて無くとも、決して葛の價値は落さない。早く言へば、人爵があつても無くても、其人の價値に高下が無いやうなもので、決して自分が人爵を持たぬからといふて、同病相憐むといふ次第ではない。

葛の花は美しいであらうかといふと、然りと首肯するのは少々困る、何も醜い花ではないが、さりとて美であるとは、如何に贔負目でも言ふ事が出來ない。

夫では何處が宜いので、人が賞美するかといふと、これも秋日蕭條の趣致を促すに足るので、之を喜ぶのである、葛は漢名鹿藿とあるけれども、鹿藿は啖切豆をもいふから、どうも判然せぬ、葛脰といふのは莢の事であらう、根は則ち葛根、御承知の葛根湯は之から採るとしてある。

葛は支那でも詩題とされて、杜少陵が「方士飛軒駐碧霞。酒香風冷月初斜。不レ知誰唱歸春曲。落盡溪頭白葛花」などいふ名吟があるけれども日本程に吟誦されない、日本では昔から澤山歌に呼んだもので、異名なども多い。

槭楓雜話

槭か、楓か

『もみぢ』即ち紅葉といふ事は、櫻紅葉、櫨紅葉、楢紅葉といふやうに、凡ての草木の葉の秋季に及びて紅變したものを呼ぶので、必ずしも、今のモミヂに限つたのではない、古歌の

佐保山の櫻の紅葉散ぬべし
夜さへ見よと照らす月影

以て證とすべしして、然も此位の事は誰でも知つて居る、知つてゐながらも、『もみぢ』といふと、直にカヘデの別名の如くにしてしまふ、猶花といへば櫻であると一般、祖師は日蓮に取られ、大師は弘法に限るが如く

に思ひ做さるゝのである。必竟紅葉する植物の腐る程有りながらも、『カヘデ』が最も紅葉し易く、且つ最も美なるが爲に、凡ての紅葉の樣を獨で占めて了つたので、誠に僥倖と言はねばならぬ。

斯の如く紅葉の二字を獨占し得て、天晴天下を統一した『もみぢ』則ちカヘデの漢字は、槭か楓か、一般には楓の字を用ゐて居る、專門家でない限りは、恐らく槭字を使用せぬ、第一槭字は楓字の如く粹でないから詩歌共に紅楓などいふやうな事を言つて了つたが、實際楓といふは誤りで槭と呼ぶが正しく且つ古い。

楓といふのは全く別の植物で、槭樹とは少も關係が無いから面白い。

本來楓は金縷梅科の喬木で、高さは二三丈にも及ぶ、春の暮から夏の始めに渡りて、嫩葉と共に雌雄各別の花を開き、頓て木刺の一杯に生へた

毬殼を結ぶもので、秋末紅葉する所から、楓のカヘデと混同され、誤認されて了つたので有る。花彙に

此木享保年中漢種渡れり、關東城中の庭と日光山とに栽ゆ、今は大木となれり、樹直上し、高く聳ゆ、葉大にして地錦(にしきづた)の如く、秋に至り紅葉す、此樹脂多く幹より噴出す、松脂の如くにして白色なり、故に白膠香の名あり、實は龍眼(龍眼肉をいふ)の如くにして軟刺あり、栗毬の如し、焚けば香氣あり、食用にならず、故に花鏡に惟焚作香と云へり。

とあるのは、此フウ(楓)の事で、圖を以て示したやうな概形を有して居る。

して見ると楓は全然械の部に入れべき者ではないが、美しき紅葉を有する樹であるから、廣き意味に於ける『モミヂ』である事は否定し得られぬ、唯科學の分類上械樹科でないといふに過ぎぬ。

然るに狹き意味に於ける『モミヂ』を楓と誤認したのは、決して日本計りではない、支那でも古くから誤り混同して居たもので、殊に詩文に於て然りである、本家本元でさへ夫であるから、文字の上に於ける分家の日本が楓も械も同一に思ひ做したのは決して無理でない、のみならず、科學

の研究てない限りは、斯く事に差別を立てゝ、矢鱈に通を振廻さぬ方が穩當であらう、文學の上から見たらば、紅楓といふ、丹楓といふも、同じくモミヂの事て、金縷梅科のフウを意味するのてないは明かて有る。

紅葉の語義

前にも言つた通り、昔は今の楓樹、則ち『カヘデ』をのみ、紅葉とは言はなんだので、紅葉といふのは、秋末になつて、葉が紅に黄に染め出すのを言つたので有るから、紅變する草木は、凡てモミヂであつたのだ、夫てモミヂとは燃るといふ意義があるともいふし、又もみ（紅）出づるといふ意味て、モミズルといふ所から、モミヂと蹙まつたので有るともいふ、いづれ其邊が紅葉の語義に違ひあるまい。

其處て紅葉とは言ひながら、黄に染める公孫樹の如きも、矢張紅葉の部に屬するもので、銀杏の紅葉とさへ言ふ程てあるから、強ち紅ばかりとは限らぬ、黄てあつても、美觀を呈すべく變色するものは、昔から紅葉の部に入れて了つたのだ。

處が緯度が北へ寄るほど、寒温が激變し、空氣が乾燥するなどいふ點から、紅葉なるものは東北地方へ行く程色が美しい、のみならず、東京以西ては全く紅葉しない草木の葉迄、實に麗しく染め出す、京阪で自慢な立田高尾、或ひは箕面の如き、宮島の如き、楓樹の紅葉こそは美しいが殘念な事には其附近にある葡萄櫻楢なぞいふ植物が、之に和して綵剪の美を衒はぬから、滿山皆紅といふ趣きはない、唐の詩宗白居易が『似レ燒非レ因レ火、如レ花不レ待レ春』と言ふ紅絳爛熳の美感を擅まにする能はぬ。

然るに、日光、妙義、鹽原、戸隱といふやうに、東北の山地へ行くと、必ずしも槭樹科のモミヂが澤山あるのではない、或は立田高尾には劣るかも知れぬが、滿山錦繡を飾る美觀に於ては到底關西地方の比ではない凡そ、針葉樹に非ず、常綠葉に非ざる草木は、悉皆紅葉すると言つてもよいのであるから、關西では紅葉の部に入れられぬものも、東北では立派に紅葉の連判に載せられるので有るから、迂濶に此樹は紅葉するのせぬのといふ批判は附けられぬ。

『かへて』の語義

槭樹を『かへて』といふのは、蛙手の略で、葉の形が蛙の手のやうてあるからだ、古へは『かへて』の字に充つるに、蛙手木としたのてあつた、然し、蛙手ては如何にも不氣味てあるから、略めて『かへて』と讀んだのて忽ち優しく麗しい名になつて了つた。

鷄冠木

鷄冠木といふのも、又槭樹の一名て、蓋し其紅葉の鷄冠に似たるより名けたのてあらう、寺島良安の三才圖會に、

鷄冠木數種あり、高き者二三丈、葉に尖岐あり、恰も蝦蟇の手の如し、大抵七八岐、或は九岐、又十二岐の者あり、之を十二一重と謂ふ、三四月、嫩葉紅色滿山に映ず、五六月青葉に復す、深秋其葉黃ばみ落ち、其歲を經るものは、即ち五月小黃花を開く、狀飛蛾の如し、槍頭に實を結ぶ、中の子牛旁の如し、龍田高尾最も多し、秋に至りて葉丹く、赫耀として天下之を賞美す、凡そ草木、秋は紅葉するもの多くあれども、蝦手樹の葉を勝れりとなす、故に只紅葉と稱するは則ち蝦手葉なり、猶只花と稱すれば、櫻花の如きなり、萬葉に曰ずや、『我宿のもみづる蛙手見る毎に妹をかけつゝ戀ひぬ日はなし』と、云々

之によつて見れば、鷄冠木といふのは、槭樹てある事疑ひない。

紅葉する木

然らば東北地方では、如何なる樹が紅若しくは黄變するかといふと、葉の全部が紅色になる者、黄色に變ずる者、半綠色を存する者、紅黄綠の三色を有する者、或ひは思ひ〳〵の濃淡があるとしても、一寸指を屈して左の如き類であらうか。

槭樹屬の凡て(二三の特例はあれども)

櫻、梅、桃等の薔薇科植物

葡萄、のぶどう、ゑびづる、つたうるし、藤、にしきづた等

はじ、うるし、ぬるで、まゆみ、の類

どうだん、躑躅等

柿、いてう、榎、漆、ななかまど、すのき、ぶな、なら、なんきんはぜ、

其他草本立のものを入れたら、殆んど勘定が出來ぬけれども、是等の植物の凡てが、關西地方で紅葉するといふ譯には行かぬ。

槭樹類

以上は一般の廣き意味に於ける紅葉であるが、狹き意味の紅葉、則ち紅葉の二字を獨占した槭樹は、我邦に幾何あるかといふと、地錦抄頃の前後三十六歌選の七十二品、草木育種の二百種、山林局の日本森林樹木圖譜の九種、又同書に、

始めは二三種に止まりしも、次第に人工を加へて變種を出し、一時は二百乃至三百種を出せり。

といふが如きは、凡て人工を以て變態せしめたる、所謂園藝的變品であるから、何百種あるか殆んど數へられぬ、然し今日自然の變種たり、同屬たりとして、檢索表に載せられてある種類を列擧すると、ザッと下の

如くである。（勿論左表の外に新らしき發見二種あれど）

はなかへて（又はなのき）
おにもみぢ
かぢかへて
あさのはかへて（又みやまもみぢ）
をがらばな
てつかへて
ひとつばかへて（又いたごかへて、ちどりのき、まるばかへて）
やましばかへて（又やましば、ちどりのき、たにあさ）
うりかへて（又めうりのき、こうりかへて、しらはしのき、いいつか）
うりはだかへて（又うりのき、かうもりかへて、こんじきのき、おぼうりかへて）
ひめをがらばな
こみねかへて
みねかえて（又ひめをがらばな）
つたもみぢ（又おほつたもみぢ、きぶれもみじ、いたぎ、いたぎかへて、いたやかへて、ときはかへて）
たうかへて（又たうふう＝德川氏享保年間漢土より輸入す）
からこぎかへて（又かのこぎ、はなかへて）
めいげつかへて（又はうちはかへて）
いたやめいげつ（一種をがらばな）
もみぢ（又かへて、やまもみぢ＝楓樹に充つ、鷄冠木といひ、紅葉といふ。邦俗なり、＝此種園藝上の變品頗る多く、枚舉に遑あらず、野村かへて、縮緬もみぢ等、皆此出なり）
めぐすりのき（又ちやうじやのき、みづばばな、てふのき）

みつてかへて（又みつてもみぢ）

おほめいげつ

くろびいたや

とねりこばのかへて

さたうかへて（所謂マップル、シウガア樹なり、葉三岐乃至五岐にして、花は瓣を缺く、樹皮を傷け、漿液を取りて砂糖を製す）

以上は嚴正なる意味に於ける槭樹の種類といふべきてあらう。

觀楓の俗

紅葉の美を愛するのは、日本斗りかといふと、決して左樣でない、西洋人も非常に喜ぶけれども、殘念ながら日本の夫の如くに、能く紅葉する木がない、恐く紅葉狩なぞといふ遊びを西洋人は知るまい、カラジウム、アジアンタム、コリウス、紫露草、大蚊蛸釣、猩々木、千年木、といふやうに、美しき葉を賞翫する俗はありながら、悲しい哉、彼等は全く紅葉の美を知らぬ。

支那では紅葉の詩賦が澤山ある、詩聖杜牧の『遠上寒山石逕斜、白雲生處有人家、駐車坐愛楓林晩、霜葉紅於二月花』といふ天下の絶誦が有る程て有るから、昔は盛んに愛翫されたてあらうが、文化漸く衰へて物質的にのみ走る今日の狀態では、紅葉を見ても腹が滿くなる理でないから、全く見捨られて了つた。

張繼が楓橋夜泊の詩て有名なる蘇州府城昌門邊の槭も、空しく朝餐の燃料と化して、只火の紅を見せた斗り、今は影も形もないといふ事である

從つて園藝上の變品でも出さうといふ老僂駝も居ないから、紅葉はあれども無さと同樣である、盆栽と言へば動物の形でも摸さうといふので有

るから、紅楓の韻致などに就いて、何等の趣味をも持つ者のないのは、我邦へ留學して居る學生等の嗜好に因つても推察されるではないか、して見ると、紅葉の美なるものは、全く日本の獨占する所で、櫻と共に日本の双美と言つてよい。

紅葉の異名

昔から歌人によつて幾多の名吟を歌はれた紅葉であるから、例の異名なる者が澤山なければならぬ。一體異名といふのは、甚だわづらはしいものであるが、これあるが爲に、植物なり動物なりを美化するのである、然し美化されて貰つたからとて、御本人は知らぬが佛、難有くも何とも無いが、人間が親から貰つた名で、滿足せず、勝手な表德を附けて、喜んで居る、夫に引き比べて動植物も喜ぶだらうと思つて、異名、寧ろ雅號を附けて遣つたのであるとすれば、稚氣愛すべしであるが、實は自分等が和歌に詠み込のに都合のよい名を與へたのであるとすると、隨分勝手な眞似をしたものだが、流石に御公家樣の風流三昧であるから、如何にも優しい徒戯である。

色見草　秋も早時雨る頃の色見草散らまくをしき山風ぞ吹く＝藏玉集＝の證歌がある

これは秋闌にして霜氣天に横ばり、滿目落莫の折から、楓の梢の色附き始めるを以て、此名を與へたのである。

妻戀草　鹿の妻戀ふといふことから、鹿の緣より紅葉を思ひ寄せて、此名を附けたもので『小倉山しぐるゝ頃に鳴く鹿の妻戀ひ草の色も殘らず』とある

錦草　これは蜀錦を織るが如しなどいふ常套の形容詞から取つたに過ぎない、歌聖貫之が『立田山松を楯なる錦草時雨てまばる山の横雲』と詠んで居る。

龍田草　立田が紅葉の名所なるより、しか呼びしものにて、花を吉野といふに同じて

ある。

もみぢの故事

紅葉の名を借り用ゐて、他物を粉飾したものは、又甚だ少くない、就中

紅葉の橋　は、古今集の『天の川紅葉を橋にわせばや七夕つめの秋をしもまつ』といふ歌に在る名詞で、牽牛織女が銀河をわたりて相會ふ時紅葉を以て橋を架したといふので猶鵲の架せる橋と同巧異曲である、或説には織女が後朝の別れに臨んで、潸然として紅涙を殞すので、夫が鵲の橋上に點綴する、夫を紅葉の橋といふのだともあるか、紅涙は形容で、實際赤い涙が出たら夫々大變な譯になる。

紅葉の帳　錦の御几帳を指すので、『鵲の河風立ちぬ七夕の紅葉のとばり涙やおくらん』と後九條内大臣の詠がある。

紅葉鳥　言ふ迄もなく鹿の異名『時雨降る立田の山の紅葉鳥紅葉の衣著てや鳴くらん』とあり。

紅葉舟　古へ秋末の舟遊に、紅葉を以て船首を飾る事があつたので、此名がある源語にも紅葉葺き飾りたる舟といふ文句もあるなり、又紅葉の御船、紅葉の小舟なぞとも見えた。

紅葉狩　謡曲に紅葉狩がある夫をもじつた院本もある是等は紅葉狩に鬼といふ恐ろしい聯想を持たせたけれ共、紅葉狩は必竟櫻狩といふに同じく觀楓の意に外ならぬ。

紅葉衣　桃華蘂集に、表黄裏蘇防の衣にて九月より十一月迄著る者とある、此外に黄紅葉、青紅葉、櫨紅葉、又黄櫨染、紅葉襲、蝦手紅葉(カヘデモミヂ)などの式服がある。

紅葉土器　は古説紛々であるが、惟ふに紅葉の宴に用ゐたる土器であらう。

紅葉鮒　霜葉漸く紅なる頃から、鮒の味が出て來る爲、紅葉鮒の稱がある、和漢三才圖會に、『深秋其鰭紅に變ず、之を紅葉鮒といふ』とあるが、交尾期に至りて、雄魚が自己の美容を飾る爲に、其鰭を紅にするのは、鮒魚(タナゴ)である、鮒は左樣な手品にし

ない、寧ろ其味が此頃になつて美味になるから言ふのである。

椷樹の實用

林間椷葉を焚いて酒を温めた衞守の風流は、椷樹を薪に、應用したのて年中伐り仆されてはたまらぬが、其材は立派に室内に裝飾用、銑工用、又は器具用とされる、椷樹のチヂレなどと稱してイタヤカヘデの年輪の面白く剔れ込んだものは、床柱の額縁として非常な高價である、其枝は前述の薪となつて、酒どころか、楢櫟と同じく立派に飯が炊ける、猶各別に應用の途を考へて見ると、左の如くである。

うりかへて　材白質にして淡褐色を帶び、肌理櫻材に似て稍粗、用ゐて箸を造る。小幹は擔ひ棒として粘力あるを以て喜ばれる。紀州熊野の山民は、此材を薄く剝ぎて、今の經木眞田の無器用なものを拵へて夫て高野笠を編む。世に之を檜笠といふけれど、實際は此木である。

樹皮は粘漿多きを以て、河にて抄紙の材料として尊ぶ。

うりはだかへて　若木の材は笠又は籠を編むに用ゐ、樹皮の生皮は荷縄を綯ふ。

つたもみぢ　材美麗なるより箱細工其他の用に供せらる。

からこぎかへて　俗まいら茶と稱するものは、此木の若芽で、茶の代用になる、若し酒が出來たらば、嘸賑い顏になるであらう。

もみぢ　材は帶赤白色、銑臺、机、箱、花臺等種々の用途に供せらる。

めぐすりのき　濃州惠那の山民が此葉を浸出して眼藥とするから、此名がある。日光の山民は、樹皮を煎じて、黄疸を治すといふ。

さとうかへて　これは樹液から砂糖を製する、材も各種の用途に供せらる。

若し夫箕面名産の紅葉は天麩羅と迄なつて、其葉が直ちに食料とされるに至つては、『もみぢ』の用途も又廣いてはないか。

槭樹の畫

古來『もみぢ』が賞用された結果、槭樹の畫は澤山ある、又其畫を應用して、器具、織物、染型等に應用されたのは、寧櫻よりも多い位である例の乾山の陶器となると、殆んど槭樹の畫斗りと言つてもよい、然るに名人巨匠の書いた畫に、槭樹の葉が殆んど完全なものが無い、槭樹科植物の特徴として、葉は必ず對生である、即ち二葉相對して居るのであるが、兎角互生になつて居る繪が多い、如何に無頓著な畫家でも、互生と對生を誤るはひどいが、實に槭樹の葉は、其對生葉が、左右同大でない必ず第一段が右大なれば、第二段は左大といふやうに、交互に大小葉を射出して居る、其爲に往々互生と見られるのである。然し普通筆意を尊ぶ畫ならば　此位の事は大目に見るが、明らかに葉脈迄を描いた模樣畫や寫生畫や、標本畫に迄此誤りがあるのは情けない。

槭樹の盆栽

盆栽の槭樹としては、普通の槭樹、即ち山槭が第一であるが、峯槭、唐楓其他槭樹屬は大抵盆栽となる。只芽出し紅葉の槭樹は、外國人向きで今日の盆栽道では、餘り喜ばれぬ。

槭樹の盆栽の接木で出來て居る者は、殆んど一見の價値もないので、必ず實生に限られる、夫で成るべく淺い鉢で仕立て、其の幹根が直幹になつて下へ竄入されぬやうにするが、今一層根張を出さうとする時には、其嫩芽の中に、主根の先を抓み取る、すると、主根は更に二條三條の側根を生じて、老皂なる根張が出來る理で、凡ての盆栽の龍蟠虎嘯の如き恐ろしき根は、此方法で造られるのである。

早くより械樹の石附と稱して、花戸で珍重する盆栽は、此械樹を鉢から拔いて、適宜に土を拂ひ落し、夫を石の上に据え、根先で石を抱かせ、其上から細い鐵線で縛めるので、一寸見ると、自然に石を蝸附したやうであるが全くは縛り附けてあるので、其先は見事な洗ひ根になつて、水盤に据えられるのである。大抵の數寄者と雖も、此石附が鐵線で縛り附けられて居るといふ事は知らぬので、往々手荒な取扱ひをして、失敗する事がある。

菊の花

雙子葉門　菊科

油菊　Chyrsanthemum. indicum *L.*
磯菊　Chrysanthemum marginatum *Mig.*
濱菊　Chrysanthemum nipponicum *Franch.*
野路菊　Chrysanthemum sinense *Sab.*
龍腦菊　Chrysanthemum sinense *Sab.* var. Japonicum *Maxim.*

黃菊白菊其他の名は無くもがなと唄はれ、畏くも我皇室の御紋章とせらるゝ菊に就いて、未だ學者間に其出所來歷が判明し

て居ないといふのは、如何にも怪しからぬ次第である。

一概に菊とはいふけれども、茲にいふのは秋菊の事で、金の麾とか、三化舞とか、雪月花とか云はれる花壇菊の事である。

今朧氣ながらに、秋菊の先祖とも思はれるものは、野路菊ではあるまいかと言はれて居るけれども、又龍腦菊と油菊との變化したものであらうとの説もある。

野路菊といふのは、新しい名であるけれども、昔から日本に野生して居たもの、今日でも四國邊には澤山ある、莖が勁硬で、花は鷄兒腸の花に似て白い、葉は他の野菊のやうに小さいが、肉厚く、質が丈夫で、葉の形も普通の野菊とは少し變つて居る。

龍腦菊、此名を新しく命ぜられたもので、從前は普通の野菊の部に入れられたのであつた、花は極極薄い紫を帶びた白色で、莖幹は野路菊よりも細、くて丈も短かい、名が龍腦である如く、花の薫りが非常に高

い、秋の末に富士の裾野などへ行かうものなら、光琳も筆を拚てゝ歎息しさうに咲て居る。

油菊は何處の野山にも澤山ある菊で、小さい黄色の花でヒヨロ〳〵して立つて居る、能畫に描かれる寒菊なる者は、是の變種であるといふ事だ。其處で、野路菊から進化したか、龍腦菊と油菊とから來たか、何方もまだ研究中に屬すといふものは、適切に秋菊の原種であらうといふものが今日、日本にも支那にもないからだ、今ある秋菊から歸納して見て解らないとなると、氣の長い話だけれども、今から野路菊や龍腦菊や油菊やを、人爲媒嫁の法で、ドシ〳〵變化さして見て今日の秋菊に近いものが出來るかどうか試して見ねばならぬ、然し學問の方から詮索して見て解らないなら、どうか古今の史乘の上から詮議して貰いたい。史乘といふのも大袈裟であるけれども、幸ひにして和漢共に、歴史の上に菊の事が澤山出て居るから、學者が擴大鏡で覗いたり、ピンセットの端でひ

ねくり廻す前に、一應是等の書物を參考にされたならば、大いに資する所があるだらうと思ふ。

夫は如才無く見て厶らうけれども、あまり解剖の方に斗り上達した醫者は、脈を取るのが下手なのと一樣で、理屈に斗り走つて了ふと、反つて見易き道理が解らなくなる。

先づ夫を調べる必須の條件として、日本に始めて秋菊が出來た年代を確めねばならぬ、勿論何年の何月幾日と迄は解るまいが、凡そ何の時代位は年代記を見ても直ぐ解る。

夫は此時始めて秋菊が出來たとは書いて無いけれども、宮中に鬪菊の會といふものが出來た。東西を分て、双方から自慢の菊を持出して品評するのであるが、何處の國に野菊などを採つて來て、勝敗優劣を定める者があらう。少くも今日の中菊位のものを天覽に供へたに違ひない、さうなると其中菊は前いふ野路菊其他を進化さしたものだらうか之を作

夫とも支那から來た者であらうか、支那では何から進化さして、

つたのか、夫とも日本の野菊の進化したものと、支那の野菊の進化したものと、此双方を媒嫁して拵へたものであらうか、當時日本から菊を輸出した事も、支那から輸入した事も、双方共に記錄に殘つて居る、斯うなつて來ると、どうやら日本と支那の雜種が、今日の秋菊を造り得たかとも思はれる。

吾人のやうに、菊の花の美と雅致とのみを見て喜ぶ者には、菊の原種が野菊から出ようが、松櫻から出ようが、一向お構ひ無いやうな物の、學者としては、正に一大事件である、況んや、我皇室の御紋章ともなつて居る事であるから、兎に角推測でなく、適切に歸著し得べき逕路を尋ね斷案を得たいものである。

菊科植物の産地

我邦産の蘭科植物を、大凡の産地を以て示すと、左表の如くである、これは無論研究中のものや、疑はしき者は入れてない、のみならず、多少は洩れたものもあらうから、夫等は豫じめ御承知を願ひたい。

夫から蘭名の配列が、五十音にも、又いろはにも據つて居ない、夫は原表がアルハベットに據つてあるから、片端から夫を飜記した儘であるが爲に、此不體裁を現出したのである。

名	産地	名	産地
ナリヤラン	（琉球、臺灣）	サヅラン	（信濃、下野、岩代、羽後）
ナゴラン	（對馬、隱岐）	一名アサヒラン	
フウラン	（日向、上總、土佐）	ムギラン	（諸州）

マメラン　（土佐、安房、日向）
一名マメヅタラン
シラン　（土佐、上總）
白花シラン
ミヤマムギラン　（土佐）
シカウラン　（小笠原島）
ソノエビネ　（下の二變種の總稱）
ニシキエビネ
キエビネ　（對馬）
エビネ　（諸州）
ヤブエビネ　（武藏）
キソエビネ　（信濃）
リウキウエビネ　（琉球？）
一名クバラン
キンセイラン　（信濃、加賀）

サルメンエビネ　（土佐、北海道）
ナツエビネ　（土佐、安房、日向）
トクサラン　（大島）
ツルラン　（琉球方面）
キリシマエビネ　（日向）
ナギラン　（土佐）
ホクロ　（諸州）
ホウサイラン　（臺灣）
ハクランも之に屬す
スルガラン　（駿河）
メランも之に屬す
カンラン　（土佐、對州）
シカンラン　（土佐）
カンボウラン　（臺灣）
ヤマラン　（攝津、相摸、上總）

サイハイラン　（武藏、土佐、相摸、伊勢、伊豆、北海道東京）
トケンラン　（東北地方）
ホテイラン　（駿河、相摸、信濃、陸中）
バイケイラン　（琉球）
キンラン　（上野、武藏、土佐）
ギンラン　（同上）
ササバギンラン　（武藏、北海道）
コアツモリサウ　（下野、武藏）
クマカヤサウ　（武藏、相摸、伊豆、土佐、下野）
アツモリサウ　（下野、武藏、騎河、陸前）
ホテイアツモリ　（北海道）
キバナノアツモリサウ　（信濃、北海道）
セキコク　（諸州）
黃花セキコク　（土佐）
コイチエフラン　（日本中部以北の諸州）

チサラン　（土佐、日向、紀伊）
リウキウセキコク　（琉球）
トラキチラン　（下野、信濃）
アチキラン　（下野）
スズラン　（北海道、陸奥、相摸、武藏、土佐、上總、安房、信濃、播磨、紀伊、豐前、岩代、）
一名カキラン
エゾスズラン　（下野、駿河、北海道）
一名アチスズラン
シュスラン　（北海道、岩代、信濃、武藏、大和、下野、）
ハチジョウシュスラン（八丈島）
チニノヤガラ　（北海道、武藏、信濃）
アチテンマ　（武藏）
シロテンマ　（相摸、武藏、大和）

ミヤマモヂズリ（北海道、駿河、土佐）
チドリサウ（下野、信濃、加賀）
テガタチドリ
ヒナラン（土佐、備中、攝津）
クモラン
ウテウラン（武藏、信濃、下野、豐前、土佐、肥前、）
ヒナチドリ（伊豆、土佐）
イハチドリ（土佐）
トモチドリ（羽後）
ムカゴサウ（武藏、上總、下野、日向、肥前、土佐、駿河）
クジロチドリ（釧路）
サギサウ（諸州）
ダイサギサウ（大隅、土佐）
ミヅトンボ（北海道、陸奥、岩代）
アヂサギサウ

アチトンボ（土佐、下野）
ムカゴトンボ（土佐、九州）
ササバラン（肥前、土佐、紀伊、常陸）
コクラン（土佐、上總）
クモキリサウ（諸州）
ジガバチサウ（土佐、相摸、北海道）
スズムシサウ（土佐、武藏、北海道）
セイタカスズムシ（琉球）
チケイラン
チツカラン（八丈島）
シマササバラン（琉球、臺灣）
イウコクラン（九州、四國、小笠原島）
ボウラン
オホフタバラン
コフタバラン（信濃、駿河、下野、土佐）

ヒメフタバラン（土佐、羽前）
アチフタバラン（下野、土佐）
タカネフタバラン（下野、北海道）
ムエフラン（土佐、攝津）
アリドウシラン（信濃、下野）
ニラバラン（大隅、伊豫、上總、琉球、八丈島、周防）
ヤチラン（下野）
ホザキイチエフラン（駿河、北海道、越後）
サカネラン（北海道、下野、陸奥）
ヒメムエフラン（信濃、駿河、下野、北見）
ムカゴサイシン
アフヒポクロ（琉球）
エウラクラン（攝津、武藏、上總、土佐、相摸）
オホバエウラクラン
コケイラン（北海道）

ササエビネ
ヒメケイラン（土佐、下野、信濃）
カモメラン（下野、駿河）
イチエフチドリ
ニヨホウチドリ（信濃、下野）
ハクサンチドリ（下野、信濃、陸奥、北海道）
イハキチドリ
チノヘラン（相摸、越後、陸中、下野）
ノビネチドリ（下野、信濃、土佐、北海道）
キソチドリ（信濃、岩代、駿河）
ジンバイサウ（信濃、相摸、土佐、陸奥）
ミヅチドリ（陸奥、信濃、武藏、土佐、北海道、）
イヒヌマムカゴ（武藏、土佐、伊豫、日向、常陸、）
タカネサギサウ（信濃）

オホヤマサギサウ（相摸、土佐）
ニツクワウチドリ（下野）
シロウマチドリ（信濃）
コバノトンボサウ（備中、陸中、越中、伊豫）
メカネトンボ（羽後、越後）
ヒトハラン（下野、土佐）
カシノキラン（土佐、安房）
マツラン（土佐、下野、伊豆）
ベニカヤラン（岩代）
ヒメマツラン（土佐）
ムカデラン（土佐、三河）
カヤラン（土佐、安房、武藏、上總）
モヅズリ（諸州）
カウロギラン（土佐）
ヒトツボクロ（土佐、下野、常陸、上總）

クモラン（土佐、安房、武藏）
ランテンマ（下野、羽後、越中、土佐、越前、）
ショウキラン
ホソバラン（琉球、大隅）
ツルツチアケビ（琉球）
ベニシユスラン（土佐）
キンギンサウ（琉球）
アケボノシユスラン（土佐、信濃、陸中）
ツチアケビ（信濃、北海道、上總日向、伊豆、肥前、土佐）
ツリシユスラン（土佐、肥前）
ピロウドラン（土佐、安房）
ミヤマウヅラ（相摸、豐後、下野、土佐）
ヒメミヤマウヅラ（信濃）

支那植物妖談

由來一種迷信的な不思議な頭顱を持て居る支那人が、植物に於ける考へはどうてあらうか、勿論牡丹精のうやな神話的の事は、いづれの國にもあるが、左樣言ふ秩序の立つた物語てなく、只道聽途說として、今日彼等に信じられつゝ有る植物の妖話を調べて見ると、彼等の人智の程度も測知される、然し元より緣切榎や、化銀杏、願掛杉といふ側の奇談てはなく、重に人間を離れて植物其物の不思議なのを集めたので、此處に抄出したのは、其多くを拍案驚異記（光緒二十二年出版――我明治二十九年）に求めたので有る。

陽山の墨蘭

陽山に木を樵る者が、山中から不思議な蘭を採つて來た、夫は瓣が純綠色で、中心が淡墨の色をして居る。芬芳鼻を撲つ斗りなので、途次之に會する者が、何處て取つて來たかと聞いたけれども、樵夫も只何心なく

路傍で摘み來つたので有るから、惜とした場所は覺えて居ない、時に村人に蘭癖があつて、夫は屹度古へより口碑に傳はる墨蘭であらうと思つて、翌年花期に搜索したけれども、終に見當らなんだ、恐らくは山神愛惜の花で有るから、濫りに俗人の眼に觸れしめぬので有うと。

抑も墨蘭といふは如何なる蘭であるか、日本に黑蘭といふのは有る、東京附近ならば上總下總伊豆邊の山間陰濕な處に生じて居る、夫は瓣が濃紫色で有るから、先づ黑と言つても差支へない、然し右に言ふ處の者は瓣が純綠で、中心が淡墨で、芬芳が高いと有る（日本黑蘭には香氣が無い）或は青寒蘭のやうなものではなかつたらうか。

瓜中の蛇

同治十三年（明治七年）六月初旬、揚州南門外の鐵匠の小徒が、一顆の西瓜を買つて、スカリ眞兩觔にして食べようとすると、こは如何に、中から一尺許の赤練蛇（山かがしの類）が、蜿蜒と這ひ出したので、小徒は呀つと驚いて氣を失ふ斗りて有つたが、人々が寄つて西瓜の外皮を査べて見ても少しも外部から這入た痕がない、實に不思議だと斗りて、終に之を明らむる事が出來なんだ。

峨眉山の萬年松

峨眉山の岩石上に、萬年松なる者が生へる、高さ一尺前後、短かさは三四寸で有る、根は少しも土に着かず、只石上に蝸附して居る斗りて有る之を家に携へ歸つて箱筐中に藏め、年を經て取り出して見ても、少しも變色せず、いつても青葱として居る、之を水中に浸すと鮮潤生けるが如くて有る、俗傳には煎じて用ゐると肝疾を治すと有るけれども、醫書にも載つて居ないから、從つて試みた者もない。

案ずるに萬年松なる者は、普通の松の類ではなく、能く夏の緣日で、著色をして賣つて

居る高野の萬年草の類であらう、夫ならば珍らしい事はない。

瓜人頭を生ず

金匱城外の村郷では、毎年必ず西瓜を栽培するので有るが、某年雙橋の一民家に出來た西瓜は一本の蔓莖に七顆生つたので有るが、夫が悉く人頭の形をして居て、眉目口鼻歴々辨すべく、只口を利かぬと言ふ斗りで有るので、觀る者皆不祥の兆として、眉を顰めたが、果せるかな、其後長髪賊の逐はれて走る者が、路此村を過ぎて、民家を掠奪した時、此畑内に村民の死尸が七人あつた、丁度瓜の數に符合したのである。

杉樹將軍

將軍の官職を持つて居る老杉が、婺源城外の湯村街に在る。欝葱たる大樹で、其下は晝猶暗き迄に物凄い。傳へ言ふ、咸豐十一年に西冠（英佛聯合軍を指す、）が、進んで此婺邑を犯して來たので、官軍が此處に防戰して營を此樹の下に張つたが、如何にも、其欝茂した枝が營門の妨げになるので、主帥某が部下に命じて、杉の樹を伐らせやうとすると、部下は忽ち頭が痛めて、手を動かす事が出來なくなつた。

之を見た主帥は大いに怒つて、他の兵に代らせて見ると是は吐血して仆れたので、流石の主帥も少し薄氣味惡くなつて、樹の下に行つて祝して曰ふには、『汝靈あらば能く聞け、我今勅命を奉じて賊を討ず、汝能く我を助けて賊を滅さば、皇上に奏聞を經て、一祠の廟を立て、汝を封ずるに杉樹將軍を以てせん』と、是夜樹神夢に示して必ず賊軍を破つて、境より逐はんと告げた。其處で主帥は大に喜んで、翌日急に英佛聯合軍を伐つて敗走せしめたのだ、其後勅命を以て、樹神大將軍に封じたので、

今に至るも香火絶ゆる事なしといふ。

古樹人語を發す

壽州禹王山頂に、古き白果樹が有る、年處を經る事幾萬歳なるか測り知る事が出來ぬ、口碑に傳ふるには、禹が「問樹幾千年」と言つたのは此樹で有ると、して見れば、太古禹の時に業に稀世の大木で有つたのだ。咸豐の初年捻匪張祿が兵を率ゐて此樹下を過ぎた時、偶ゝ此樹を焚からとしたので、樹は忽ち天地に響くやうな聲を擧げて、張祿を罵しつて、『貴樣が若し我を焚けば、貴樣を百戰百敗せしむるぞ』と怒鳴たので利かぬ氣の張は大いに怒り、直ちに火をかけて燒き拂つたが、賊徒が去るや否や、火は自然と消えて了つた。併し張祿は果して、連戰連敗して、官軍の爲に生擒されたので有る。

竹枝の牡丹

揚州の鹽商黃氏の後園に有る竹の枝に見事な牡丹が咲いた、一は雪白、一は深紅、共に千葉の逸品で有る。近鄕近在聞き傳へて、觀る者堵の如き有樣で有つた。

主人の黃は喜びの餘り賀宴を開いて客を請じ、又は寫生圖を作らせるやら、名家に詠草を乞ふやら、大騷ぎをしたが、其後程なく其子が非常に出世をしたので、果して竹技牡丹の瑞祥に違はなんだと喜んで居たのも束の間、忽ちにして黃氏の家道衰へ、二十年ならずして、其屋敷跡が野原と化して了つた。

牡丹の妖は支那の古書舊記俗傳等に屢見る所で有る、唐玄宗の沉香亭前にも、兩頭の牡丹が咲いた事が書に見えた、之は慥か奇色の花で、種々の變化を花の上に示して見せた

といふ、要するに桃に源平の咲分は有り或ひは甘藷に牽牛花を接ぐ事は出來るけれども牡丹を竹枝に咲かせるといふのは、印度の植物手品師でも出來ない藝であらう。

巨蓮

浙江の沈氏の家に廣さ二畝斗りの池があつて、毎年蓮の花が見事に咲くので有るが、或年池中に只一花を開いた、所が其の大いさは巨大なる盤のやうで、實に天下の珍とするに足るので有る、然るに秋末になつて實が出來て見ると、一顆の大さ棗程も有つた（支那の棗は日本の棗の約三倍大）見物の群集は妖だとか、祥だとか、喧々囂々たる者て有つたが、別段何の障もなく濟むだやうて有る、拍案驚異記の著者の友人で周といふ人が、此蓮の實一個を携さへ來つて、委しく話したので有る。

蓮の巨大なる者は、强ち虛說でもあるまい、支那の南方には、隨分大きな蓮の花を見る事が有るといふ。然し葉の大きなのなら、別段是等を珍とするに足らぬ。普通日本に野生する黃蘆（オニバス）は、浮葉の大さ彼是二疊數一杯程なのもある。

又英國のキウの帝室植物園に培養されるのは、葉の大さ二十尺四方もあるので、これは印度の原產と傳へて居る。

氷中花

楊州に一富豪があつた、某年の冬其父の生辰に方つて、平生恩顧を受ける者や、知己等より賀品を貰つたが、其中に氷を贈つた者があつた、冬氷を吳るといふのは、餘程氣の利かない者だと笑ひながら夫を見ると、不思議にも其氷塊の中に、紅薔薇一朶と、春蘭一莖とが、見事に咲いて居たので、衆客皆驚き仆れん斗りに呆れて了つた、次日になつて、氷が解けてから見ると、薔薇は造花であるが、蘭は眞の生花であつた、試み

に造花の薔薇を地中に扞して、酒を澆いて置いたら、姑らくにして新嫩を吹いて、終に長大して叢を成すに至つた、何と不思議な仙術も有つたものではないか。

此物語の如きは、不思議でも何でもない、氷は無論人造氷で、日本などでは夏の宴會の卓子飾りとして、製氷會社へ五六圓も送れば、花の這入つたのは勿論、鯛でも比目魚でも、游いで居る儘を氷結さして持つて來る、夫から造花の枝か扞して活いたといふのは其枝が新らしく伐つた眞箇の薔薇であつたからで、珍らしくも何ともない。

西洋植物奇談

前掲の支那植物妖談の因みにより、其對比の爲と言ふには非ざれども、西洋植物奇談の二三を一粲に供する事とせり、由來西洋にても東洋的妖怪譚、奇蹟談等の多き、決して日本支那に劣らざるのみか、或ひは更に倍加せるが如きを覺ゆ、されば植物に就いての妖話、又は迷信的傳說の如きは、到る處に之を聞かざるはなく、殊に米國に於て最も多きを見れども、茲に掲載する者は、左る不思議談に非ずして、事實に於て、吾人が逢着し得る奇樹妖木を紹介するのみなり。

覇王樹の慘害

覇王樹は熱帶地方に多く原產野生する植物なるを以て、其我邦に渡來したる者も、九州地方の如き暖地に移植した者は生育佳良にして、東京附近の露地に於ては、嚴冬霜害の爲に凍傷して假仆する者が多い、僅かに東海道に在りて、駿河伊豆房州の如き、暖潮の温氣を受くる處のみ、盛

んに繁茂するのである、駿河の龍華寺に在る同樹の如きは高さ丈餘、簇々叢を成して十餘歩の地を蔽ふて有名である。

然して斯の如き覇王樹の大樹は、一の名木として、我邦人の爲に尊重せられ、態々往きて見る者すらあれども、其原産地に在りては、反つて如何にして此大樹を族滅し得るかに腐心しつゝ有りと云ふ、蓋し覇王樹が家畜を害する事は、驚く可き程にして、移民に多大の損害を與へ、或ひは殖民事業を廢絶に歸せしむるの虞がある。

英人エー、ビイ、コウリー氏の濠州巡見記の一節に曰ふ。現今クインスランド地方に於ては、盛んに牧畜業を計劃し、幾萬の牧畜業者が、擴大なる牧場を有し、無數の家畜を放養して、天然の儘なる牧草の甘汁に、家畜の嗜好を飽かしめつゝあるが、是等牧畜業者には、又天然の敵が有る、曰く熱病、曰く野兎、曰く山獒、此三者は畜業者の恐るべき敵なれども、熱病は衞生方法の完備を期せば、全く衰退せしめられ、野兎の蔬菜園を蹂躙するも、山獒の家畜を襲ふも、共に銃火を以て、漸々殲滅に歸せしめられる、然るに美しき花を開き、優しき香を放つ覇王樹の跋扈に至りては、銃も以て仆す能はず、劒も以て殺す能はず、火も燬く可らず、水も漂よはす可らず、殆んど手を額にして、其成り行を見るより外はない、吾人の温室裡に畸形にして艶冶なる花を開く此植物は、吾人の愛護にも拘らず、屢々水濕の過剩なるが爲に、腐敗する事がある、人をして或ひは培養難を稱へしむるに至る程なるに、これが家畜を傷害すと言はゞ、恐らくは世人の信を買ふ能はざらんも、事實は全く一大害毒を流布しつゝ有る。

此植物の種子は、産額頗ぶる多く、一顆破れて、數百の粒子を散し、其粒子の地に落ちたる者は直ちに發芽し、第一年にして、早くも三四葉を重ね、二年三年にして忽ち丈餘に達し、花を開き種子を結び、到る處に天然の障壁を造るので、農業者は園圃の開墾に苦しみ、畜業者は其放飼せる家畜が、覇王樹中に嚙む水分を獲んとして、此葉肉を嚙み、鐵の如き針の爲に口中を損傷して遂に再び食餌を獲る能はずして死するを憂ひ、各々苦心して覇王樹退治をするが、此植物は假令打ち仆して、五體を四分五裂に碎くとも、其一片誤つて地に落つれば、直ちに又新植物を發生するので、容易に撲滅する事が出來ないのみならず、一の植物を仆せば、更に十の植物を生ずる理なるを以て、殆んど手を下す由がない、況して其野生區域は、只一局部に限らず、全ニウジーランドに渡りて、丘阜と言はず、園圃と言はず、到る所に瀰漫し殆んど此植物を以て全土を覆ふが如き有樣なので、到底人力を以ては、如何ともする事が出來ない。

然し此恐ろしき植物は元此地方に原産したのではない、曾て移住民が他の地方より將來した者であつたが、此地の天候と土壤とは、能く此植物の生育に適するを以て、いつしか野生となりて忽ちにして此の如き大蕃殖を見るに至つたのだ、されば僅に十年二十年にして此有樣なるを以て見れば、數十年の後には全く此植物の天地となり、鐵刺縱横又寸毫身を容るゝの餘地なけんと、茲に移住民は俄かに恐慌を來し、懸賞を以て覇王樹撲滅方法を募るに至つた、然るにニウサウスウエールス地方の某は此植物を煮て、豚の飼料となせば、一擧兩得の策なりと考へ、直ちに施

行したけれど、鍛鐵の如き其刺針は多少軟靱に化すとも、動物の胃腸に入りて、甚だしき害毒を逞しうし、數千頭の家畜を、一日に仆すに至つた、茲に於て住民中より新に覇王樹討伐隊を組織し、手斧、鶴嘴、利刃等の獲物を携へて、一齊吶喊をなし、一々區劃を設けて艾鋤に力めたが敵も去る者、稻葦竹麻と羅列して、鎗の穂先より鋭き針を並べ、寄らば突かんと構へるので、其接戰の苦艱殆んど名狀すべからず、討伐隊の勇士は、顏面手足等に輕傷重傷を負ひ、流血淋漓として、殆んど完膚なき有樣となつたが、されども漸く一區劃を掃蕩し得て、敵の死屍を山と積めば、驚くべし、高サ二間、巾四間、長さ四十餘間に餘れる丘陵を築き上げた、これ實に三日餘り伐截した覇王樹の遺骸なのである。

是に於て、後に慘害を遺さゞらんが爲、直ちに火葬に附す事となつたが此地方は荒蕪廣漠たる原野で、燃料甚だ少ない、少許の火では、死屍中に蓄積せる水を射出して、巧みに消防するから、數日來の苦心も、又一頓挫を來した。

時に一案を進むる者があつて、此妖植物を殲滅するに、單に勞力のみを以てする時は、吾人は限り有るの力を以て、限なき敵に苦しめられ、奔命に疲れて、吾人先づ此地方を退去するの運命に逢著せねばならね、如かず、試みに化學上の作戰計畫をなし毒液を以て敵を殺戮せしめんにはと終に最後の手段として、砒石膽礬等を溶解せしめたる毒水を作り、四百ガロン入の水溜に充し、之を農業馬車に搭載して、到るに從ひ、敵の體軀に創を穿ち、射水器を以て毒液を注入したところ、さしも獰惡なる覇王樹も終に敵し難く、二日にして體壞れ、十日にして全く地に仆れ、全

身浮腫を生じて腐敗し盡して了つたので、全土の移民始めて枕を高くするを得たのである、且つ其失費の如きも、一エークル僅かに四五圓で濟むから、之を討伐隊の冗費一エークル百圓を要しても、猶族滅し得ざるに對して、實に宵壤の差がある。

笑樹（ラッフインダツリー）

亞剌比亞地方の爛砂索々たる處に、笑樹と稱する植物がある、丈高きは十尺に達し、蓬々として簇生する、花は黄金色で、種子は黑色、大いさ小豆位ある、人若し其黑子を嚙むと、味甚だ甘く、阿片に彷彿たる香氣を覺ゆるが、之を嚙む事兩三粒なるに及びて、胸宇漸く爽かに、次いで見る者聞く者、凡て興味を覺ゆるに至り、濫りに笑ひ始めて殆んど抵止する所がない、人の歩行する者、犬の走る者、皆笑ひの種とならざるはなく、精神漸く昏迷すると飛舞踴躍して笑ひ、終に體軀疲勞して、笑ひながら、昏睡すること一時間餘、始めて覺めると、茫としてまた前事を知らない、恰かも酒狂者が覺醒後醉中の痴態を記意せざると一般だと、バグレーヴ氏の亞剌比亞事情にあり。

此笑樹なる者、果してバ氏の言ふが如くなるや、原書には笑樹（ラッフインダツリー）なる俗稱を記して、其學名を載せざるを以て、形狀を審びらかにする能はず、又碩學の判定に俟つ能はれども、我邦俗傳する笑茸なる者は、人之を食へば無意識に笑を發すと言へり、皆一種の毒素が人の腦を刺激して、一部の麻痺を生ぜしむる者なるべし、因みに各地の山地に舞茸なる者を生ずれども、こは此菌蕈を採集する時、一度舞踏をなして後に手を下さゞれば、食後一種の舞踏病に罹ると言ひ傳へたる者にして、事實然るには非ず、予は戸隱邊にて屢々之を採りて食したる事あれども、何等の兆候をも示さゞりき。

魔樹

北米合衆國ネバタ州のタスカロラ市を距る北方十二哩、一丘陵の半腹に

魔樹に稱する灌木がある、高さ僅かに六尺、抱尺餘、渺たる小木で又何人が何處より將來して植ゑた者かを知らないが、此樹夜に入れば、忽ち光鉦を發し、恰も小飾火を施したるか如く、遠方より之を望見されるる暗夜の如きは光彩更に陸離として、木の下に在りて細字の新聞紙が讀めるといふ、俚人は之を魔樹と稱して神木と崇め、種々附會の說をなして、濫りに近接する事がない、タスカロラの魔樹と言へば、同市附近十二不思議の第一に指を屈せらる。

こは樹皮より分泌する脂液の作用に基くか、何人にても此樹脂を掌に附すれば、依然として、光輝を發すと言ふと雖も、予の臆測する所によれば、樹脂に非ずして、一種の黴菌の作用に非ざるなきか、此樹も魔樹とのみありて、其學名を記さず、只葉形南五味子（びなんかづら）に似たりと言ふのみなれば、木犀若くは槲の如き廣楕圓形の葉を有するものなるべし、未だ此樹の他に分布されたるを聞かざれば、樹脂に非ずして、黴菌作用となすの中れるを覺ゆべし。我邦にても例は異なれども、甘露樹等の稱をなし、樹より甘露を雨らすといふ說あり、先年上野公園の北隅に甘露樹ありといふを聞き、近づき見れば普通の樹にして、其甘露なる者はアリマキと稱する蚜蟲の分泌物なりしなり、畢竟の魔樹も詮議立すれば、或は光を發する黴菌の作用なるなけんや。

酒樹

麵麭の木、砂糖の木、牛乳の木と言へるは、屢々聞く所で麵麭の木は、其實を蒸燒にして食し、砂糖の木は、甘蔗の如く、精製して糖分を得る者、牛乳の木は果實より獲る者と、樹皮を傷けて滴らす者とある、只酒の木に至りては、多く聞かないが、實に亞弗利加の西岸、炎威燬くが如き所に自生して居る、學名をラフヒア　ヴニフエラと言ひ、一般葡萄酒

木として通稱せられる、椰子の一種に近く、樹質頗る軟脆丈高さは二丈に達し、梢頭に葉がある、概形棕梠に似て婆娑たる者だ、土人炎熱に苦しむ時は、屢々其下に來りて涼を取り、樹皮を傷けて液汁を吐ひ、渴を醫す、該樹の液は半透明白色で、其味甘く、之を甕に充して蓋を密閉し數時間乃至一日を經過する時には、液は自然に醱酵して其の色赤紫黑色に變じ、酸味を帶びて、純然たる古舶葡酒の如く、之を飲めば醉を沾ふに足ると言ふ、造酒稅の爲に苦しめらるゝ左黨は、大擧して亞弗利加西岸を襲ふべきてはないか。

泣樹

魔樹も、酒樹もあるとすると、又泣樹なからざる可らずである、樹は學名をコウサルビヤ　ブルビヲサと呼ぶ、泣く樹、又涙の木と稱せられる近年カナリイ群島中の一に於て發見した者て、高さ數丈の大樹になる、其名の因て起る所以は、間斷なく葉毎に露を滴らして、恰かも雨滴の如きより此名を生じたのて、樹下は涓滴の爲に一面に沮洳を生じ、流れて細流となる所から、土人は其水を掬んて飲料に供しつゝ有る、眞に好箇の涙川てはないか。

此木の蕚生を採集して發見當時に之を歐洲某の植物園に送り、次いて英國のキウにも送せらると言へり、後者は前者より普殖せしめたる者か又は原產地より輸入したる者なるかを知らざれども、我邦にては、生木も腊葉も未だ之を見る能はざるなり、涙川の水源探檢も、一植物の作用とありては、興味甚だ索然たるを覺ゆ。

髑髏樹

髑髏樹は泣樹酒樹の如く、樹木自身の作用に非ずして、數世紀前に人類が之に手を觸て生じたる者だが、爾來全く世に知られずして今日に至り